

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第378集

金館跡発掘調査報告書

一級河川滝名川基幹河川改修事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

金館跡発掘調査報告書

一級河川滝名川基幹河川改修事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成12年度の岩手県教育委員会のまとめでは、11,000箇所以上に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことですが、その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このように埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本報告書は「一級河川滝名川基幹河川改修事業」に関連して、平成12年度に発掘調査を行なった紫波町金館跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、本遺跡は滝名川の北岸に立地する中世を中心とした時代の居館もしくは城館であると思われま

す。本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解あるいは啓蒙普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査および報告書作成にご援助、ご協力賜りました盛岡地方振興局土木部をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成13年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 村上勝治

例 言

1. 本書は、岩手県紫波郡紫波町南日詰字梅田 2-1 ほかにある金館跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一級河川滝名川基幹河川改修事業に伴い、県教育委員会生涯学習文化課・盛岡地方振興局土木部の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は以下のとおりである。

遺跡登録台帳	LE76-1235
番号遺跡略号	KD-00
4. 調査期間は平成 12 年 10 月 2 日～11 月 7 日、調査面積は 2,300m²で、調査担当者は岩淵計、吉田真由美である。
5. 調査の室内整理期間は平成 12 年 11 月 8 日～平成 13 年 1 月 31 日、整理担当者は岩淵計、吉田真由美である。
6. 本報告書の執筆は、岩淵計が担当している。
7. 石質鑑定は花崗岩研究会に依頼した。
8. 座標原点の測量および地形測量は次の機関に依頼した。

座標原点の測量	----- 株) ハイマーテック
地形測量	----- 株) シン技術コンサル
9. 本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導とご協力をいただいた。

桜井 芳彦 (紫波町教育委員会)	中村 英俊 (岩手県教育委員会)
------------------	------------------
10. 野外調査にあたっては紫波町と地元の方々にご多大なるご協力をいただいた。
11. 調査成果はこれまでに調査略報に掲載してきたが、本書の内容が優先される。
12. 土層の色調観察は、「新版標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 1989) を用いた。
13. 本遺跡から出土した遺物および調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目次

本文目次

序

例言

目次

I 調査に至る経過	3	IV 検出された遺溝と遺物	15
II 遺跡の立地と環境	3	1. 曲輪	15
1. 遺跡の位置	3	2. 堀跡	15
2. 地形と立地	3	3. 柱穴列	19
3. 地質と基本土層	4	4. 土坑	23
4. 周辺の遺跡	4	5. 焼土遺構	28
5. 周辺の城館遺跡と歴史的背景	4	6. 溝跡	31
(1) 古代	6	7. 柱穴状小土坑	31
(2) 中世	6	V 遺構外出土遺物	36
6. 金館跡に係わる伝承について	7	VI まとめ	41
III 野外調査と室内整理	10	1. 金館跡の構造について	41
1. 野外調査の方法	11	2. 遺物	41
2. 室内整理	12	3. まとめ	41

表目次

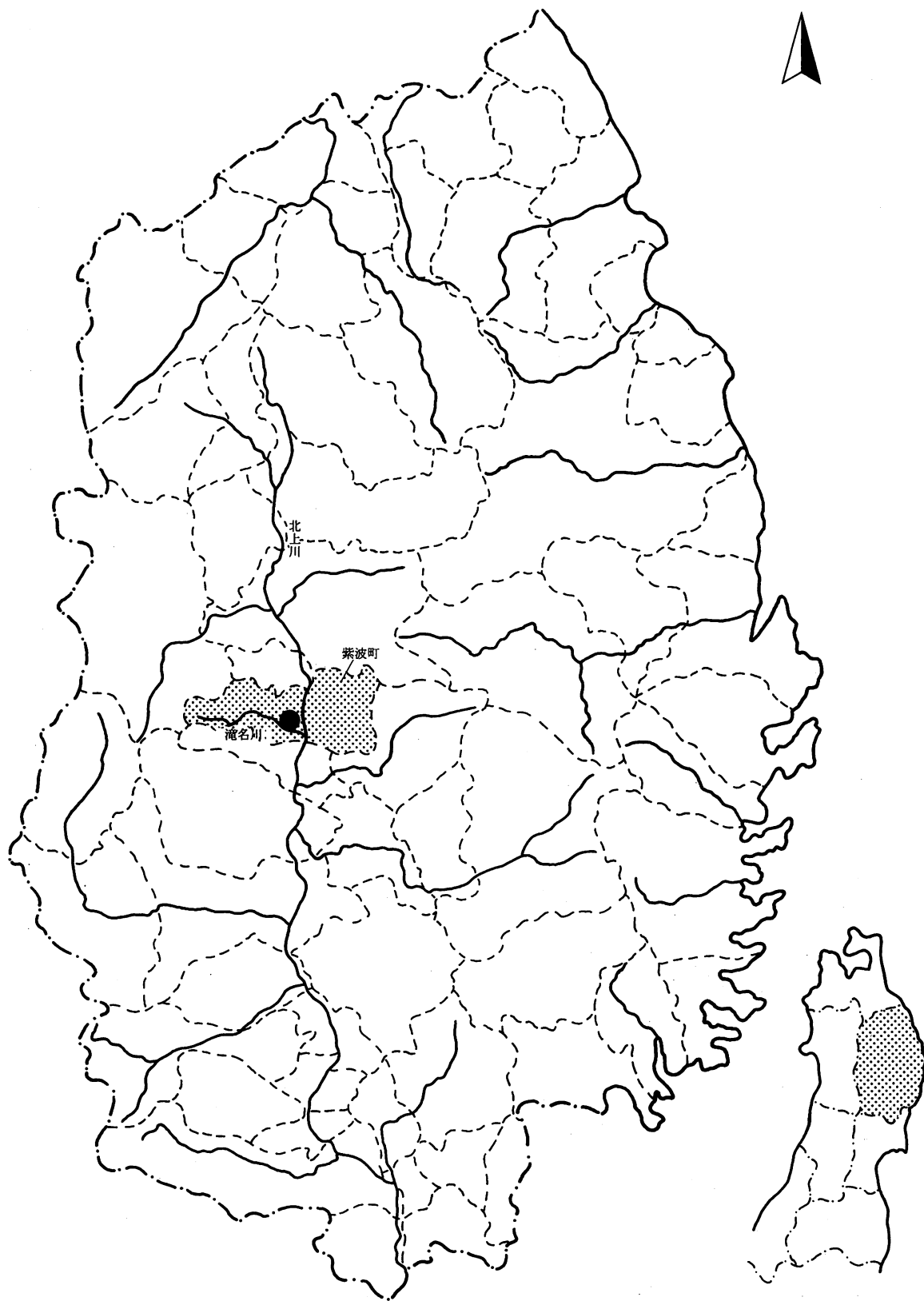
第1表 周辺の遺跡一覧	9	第6表 土器観察表 土師器・須恵器	36
第2表 紫波町内の城館遺跡	10	第7表 石器観察表	38
第3表 柱穴列柱穴観察表	22	第8表 土製品観察表	38
第4表 柱穴状小土坑観察表	33	第9表 銭貨観察表	38
第5表 土器観察表 縄文土器	36		

図版目次

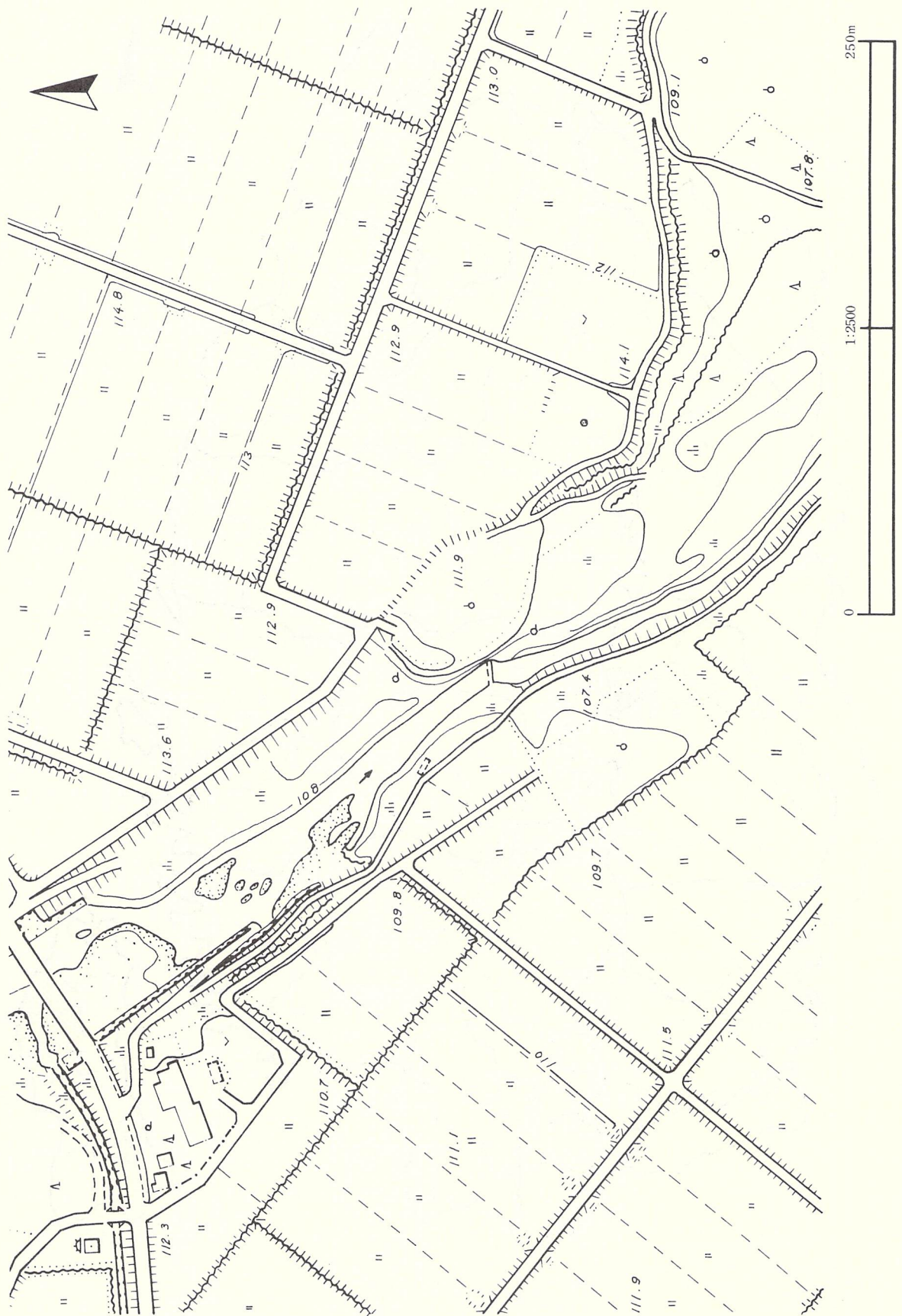
第1図 遺跡位置図	1	第12図 1～5号土坑	26
第2図 遺跡周辺の地形図	2	第13図 6～10号土坑	27
第3図 基本土層	4	第14図 11号土坑	28
第4図 遺跡周辺の地形分類図	5	第15図 焼土遺構	30
第5図 周辺の遺跡の分布図	8	第16図 溝跡	32
第6図 金館跡要図	13	第17図 柱穴状小土坑(1)	34
第7図 遺構配置図	14	第18図 柱穴状小土坑(2)	35
第8図 1号曲輪	16	第19図 出土遺物(1)	37
第9図 1号堀跡	17・18	第20図 出土遺物(2)	38
第10図 1号～4号柱穴列	20	第21図 調査終了後地形図・遺構図	39・40
第11図 5号柱穴列	22		

写真図版目次

写真図版 1	遺跡全景……………45	写真図版 8	5～8号土坑……………52
写真図版 2	調査区全景・調査前の遺跡近景…46	写真図版 9	9～11号土坑・1号焼土遺構…………53
写真図版 3	曲輪斜面部……………47	写真図版10	2～6号焼土遺構……………54
写真図版 4	1号堀跡……………48	写真図版11	7・8号焼土遺構・1号溝跡…………55
写真図版 5	1号堀跡、1・2号柱穴列……………49	写真図版12	2号溝跡・PP1土器出土状況 基本土層……………56
写真図版 6	3・4号柱穴列……………50	写真図版13	出土遺物……………57
写真図版 7	1～4号土坑……………51		



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形図

I 調査に至る経過

金館跡は「一級河川滝名川基幹河川改修事業」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することになったものである。

当事業は、一級河川滝名川筋梅田地区において現況流下能力が40%と低いことから、その向上を目的とする河川改修事業である。事業者である岩手県盛岡地方振興局土木部では、事業実施に先立ち岩手県教育委員会に対し事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地踏査により埋蔵文化財の存在を確認し、平成11年6月8日埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施した。試掘の結果中世の城館等の遺構が発見されたことから、工事着手に先立ち記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨を盛岡地方振興局土木部に通知した。

通知を受けた盛岡地方振興局土木部では、岩手県教育委員会からの平成12年度埋蔵文化財発掘調査に係わる事業集約の問い合わせに対し、調査を実施して欲しい旨の回答をした。

回答を受けた岩手県教育委員会は盛岡地方振興局に対し、平成12年度教文第1074号「平成12年度埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成12年度に発掘調査を実施し、実際の調査は(財)岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

金館跡の所在する紫波郡紫波町は、岩手県のほぼ中央にあり、北に矢巾町・盛岡市、南に石鳥谷町、東に大迫町、西に雫石町にそれぞれ接する。遺跡は紫波町南日詰字梅田2-1ほかに所在し、JR東北本線日詰駅の南西約2kmの地点にある。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図の「日詰」図幅に含まれ、緯度は北緯39度31分39秒、経度が東経141度08分33秒付近に位置している。

2. 地形と立地

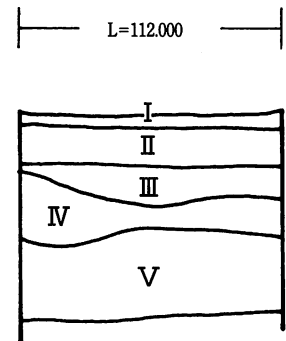
紫波町は中央部を北上川が流れ、西方には奥羽山脈の一部となる山地が、東方には北上山地の西縁部となる山地が存在する。北上川は岩手県の西岳を源とし、岩手県を縦断し宮城県に至る東北地方で最長の河川である。町内ではほぼ直線的に南流し、その広い河谷平野の多くは台地によって占められる。奥羽山脈は海底火山や圧力による褶曲により造られ、基本的に火山灰が堆積し、緑色の岩石となっているグリーンタフで構成されている。東根山(928m)をはじめとする西方の山地は、標高500m以上の大きな山塊で、中起伏山地に相当するが、起伏量が400m以上を示す部分も局地的に認められる。北上山地は石灰質物質が堆積・隆起した高地が削られて形成され、主として古生層及び花崗岩類からなる。東方の山地は朝島山(607m)を中心とした部分は中起伏山地に相当するが、その他は小起伏山地に相当し、小山塊で構成されている。このような両山地の構造の違いから、北上川を境として、その西岸と東岸では地形に対照的な違いが認められる。北上川西岸は奥羽山脈から流れ、北上川に至る河川によって形成された大小の扇状地がみられ、この扇状地を刻むかたちで段丘もよく発達している。河谷平野の台地は、このように扇状地や旧河床が段丘化したもので、新旧を異にする下位、中位、上位段丘に分類できる。一方、北上川東岸は北上山地の縁辺部が北上川に迫るように分布し、小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。遺跡は奥羽山脈から北上川の西岸を東に向かい、北上川に合流する滝名川の北岸にあり、自然堤防とそれに接する中位段丘が突き出ている微

高地上に立地している。遺跡の南西端を滝名川が洗うように流れ、滝名川と北上川の合流地点からは、滝名川の上流へ約3.8kmほどの距離となる。標高は107m～112mで、滝名川との比高差は約5mである。現況は果樹園及び畑地である。

3. 地質と基本土層

北上川河谷平野に広がる中位段丘では厚い堆積物が存在し、上部は灰白色粘土で、その下位に礫層が続いているとされる。本遺跡の基本土層は以下の通りである。

- I層 10 YR 3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややなし 表土
- II層 10 YR 3/4 暗褐色シルト しまりややなし 粘性ややあり
10 YR 7/6 明褐色粘土質シルトが小～大ブロックで30%混じる。
耕作によって攪乱されている層である。
- III層 10 YR 3/4 暗褐色シルト しまりややなし 粘性ややあり
10 YR 7/6 明褐色粘土質シルトが小ブロックで3%混じる。
遺物を少量包含するが、耕作による攪乱を受けており、部分的にしか見られない。
- IV層 10 YR 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり 地山
遺構検出面である。
- V層 10 YR 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり
灰白色粘土質シルトが30%混じる。



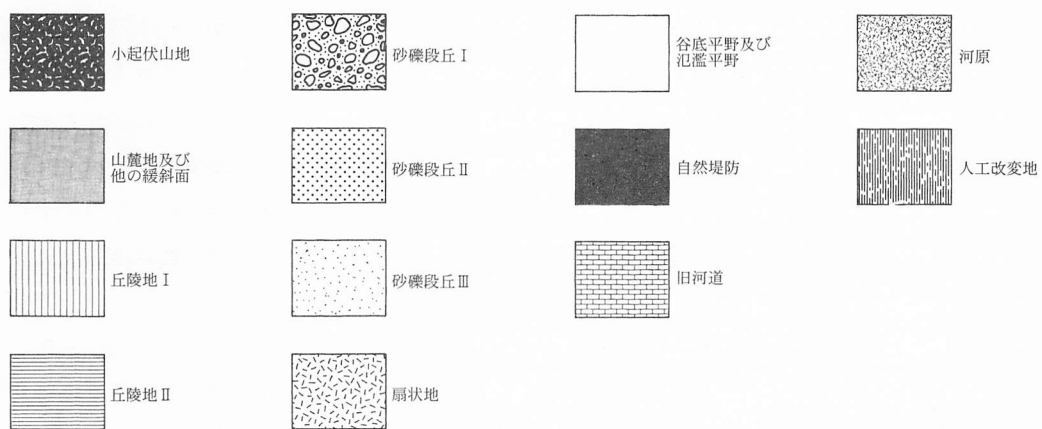
第3図 基本土層

4. 周辺の遺跡

遺跡の周辺には、縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が分布している。岩手県教育委員会1999『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によると、紫波町内では約330カ所程度の遺跡が確認されている。縄文時代では西田遺跡から環状集落が検出されるなど、縄文土器が出土する遺跡は80カ所以上にのぼる。弥生時代の遺跡では墳館遺跡から、墳墓とみられる土坑が検出されている。古代においては約170カ所の遺跡が確認されており、発掘調査が行われた稲村遺跡をはじめとする20カ所足らずの遺跡から、奈良・平安時代の集落跡が確認されている。上平沢新田遺跡からは墨、墨書土器、掘立柱建物跡、板材使用の住居、万年通宝など、他の集落ではみられない遺物が出土している。杉の上II遺跡では、遺跡が立地する段丘の東端から、須恵器を焼成した窯跡が2基発見され、須恵器の制作に係わっていた工人の集落である可能性が高いとされる。滝名川北岸の南日詰長根遺跡や南七合遺跡といった本遺跡の近隣に所在する多くの遺跡からも、土師器あるいは須恵器が出土している。また城柵官衙遺跡では、弘仁三(813)年ごろに志和城から移転造営したと推定される徳丹城が、本遺跡から約9km北に位置している。

5. 周辺の城館遺跡と歴史的背景

『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県教育委員会編)によると紫波町内の城館遺跡は51カ所が確認されており、岩手県教育委員会1999『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』では57カ所が城館跡として登録されている。ここで町内の城館遺跡とその歴史的背景について簡略に述べたい。



第4図 遺跡周辺の地形分類図

(1) 古 代

徳丹城の機能が衰退した後、10世紀後半から11世紀中頃にかけては、紫波地方を含めた奥六郡（伊沢・和賀・江差・稗貫・志和・岩手郡）は安倍氏の支配するところとなる。11世紀の前半、安倍頼良の代になると勢力基盤を着実に固め、各地に柵を造営し、地域支配の拠点とした。『陸奥話記』には12の柵が見え、雫石川や胆沢川などの北上川に注ぐ河川の河口付近に立地していたとされるが、具体的な所在地については、該期の遺構、遺物が確認されている鳥海遺跡（鳥海柵擬定地・胆沢郡金ヶ崎町）以外は、特定できない柵がほとんどである。町内の遺跡で、この時期の遺跡の可能性があるとされるのが善知鳥館である。遺跡は滝名川の北岸、北上川との合流地点から北西に約1.5kmにあり、中位段丘上に立地している。昭和38年に町教育委員会を中心として発掘調査が行われ、柵列、堀跡などを検出し、安倍氏の居館跡とされる。しかし該期の遺物は出土していない。また城館遺跡ではないが、宮手遺跡は北上川西岸から西へ約5kmの沖積段丘上に立地し、カマドではなく自床炉らしいものを持つ竪穴住居跡が検出されている。安倍氏が滅亡する前九年の役の後には清原氏が支配することとなるが、後三年の役を経て、11世紀後葉に藤原清衡が陸奥・出羽国の支配権を継承すると、志和地方は藤原氏の分族である、樋爪氏が支配した。樋爪氏は藤原清衡の子清綱に始まると伝えられ、砂金の採掘、水田開発などを行ったとする説もあり、樋爪氏の居城とされる樋爪館は、北方世界に対しての重要な拠点となったのであろう。樋爪館は北上川西岸に広がる中位段丘の東端部に位置しており、河岸低地との比高は2～4mである。町教育委員会によって昭和40年から平成12年までで、合計24次の発掘調査が行われており、12世紀後半の掘立柱建物跡、井戸跡、堀跡などが検出され、かわらけ、国産陶器、木器が出土している。

(2) 中 世

文治5（1189）年の奥州合戦により、藤原氏が滅亡し、奥羽両国の旧領は源頼朝の御家人によって分給された。斯波・岩手郡の北上川東部は御家人河村秀清に分給され、大巻に居城を築いたといわれる。樋爪氏は奥州合戦の際に居館を焼いて逃亡したが、投降した一族の俊衡が本領安堵を得て樋爪の地に居住したとされている。鎌倉時代中期に入ると、樋爪氏の旧領は足利氏の一族である斯波氏が領知することとなり、北上川河東の河村氏と河西の斯波氏との二氏併立の時代となる。鎌倉幕府が倒され、後醍醐天皇の政權が樹立されると、元弘3（1333）年に北畠顕家が陸奥守に任じられ、奥州でも新政が始まった。これに対して足利尊氏は建武2（1335）年に斯波家長を奥州管領に任じて、北畠顕家の陣営に対抗する勢力が形成されていった。このようにして奥州においても南朝派と北朝派に分かれての対立が始まり、斯波郡でも南朝を支持した河村氏と北朝の中心である斯波氏は激しく相争った。しかし次第に南朝は衰退することとなり、それとともに河村氏宗家は没落し、斯波氏に屈するところとなる。それ以後斯波氏は北上河東をも合わせて、斯波郡六十六郷を支配することとなる。その後三戸南部氏の南進政策が展開され、斯波氏と南部氏の間抗争が激化する。大永元（1521）年から元龜二（1571）年にかけて紛争がくり返され、ついに天正六（1588）年岩清水右京の謀反をきっかけに南部信直に攻略され、斯波氏は滅亡する。斯波氏の滅亡により、斯波郡は南部氏に増加されることとなり、近世に至るのである。

発掘調査された中世城館についていくつかふれると、斯波氏の代々の居城と推定される高水寺城がある。遺跡は北上川西岸の独立した丘陵上に位置しており、すぐ東側を北上川が洗うように流れる。規模は東西500m、南北700mに及び、最頂部の標高は約180m、低地との比高差は85mほどである。最頂部が本丸跡とされており、北へ張り出す平坦地が姫御殿跡となる。さらに南西には吉兵衛館、その西方には西御所とよばれる郭が続いている。調査によって整地層に建てられた礎石建物跡や、その下層から掘立柱建物跡が検

出されている。遺物では中世末から近世の陶磁器、布目瓦、鉄釘、石製香炉、北宋銭が出土している。姫御殿跡からは上幅 2.2 m、深さ 2 m の薬研状の空堀、掘立柱建物跡が検出され、さらに南端部の平坦地からは掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柵列、櫓が検出されている。本丸南西の郭からは園池、掘立柱建物跡が検出され、ここからは草屋根の焼け落ちた炭化材、将棋の駒、曲物、椀、箸などの木製品が出土している。また柳田館は奥羽山脈の東縁部にあたる丘陵上に立地しており、滝名川流域から北上川東岸を一望できる。規模は東西 400 m、南北 300 m で、南館・北館と、中堀を隔て東側に位置する東館から構成され、周囲を空堀と土塁によって囲まれている。発掘調査は東館の大部分と北館、中堀の一部が行われ、薬研堀である空堀に沿って土塁が築かれ、土塁には柵列が施設されていることがわかっている。また東郭の南西端には土塁、柵列に続く城戸跡があり、冠木門が伴っていた。郭内の平場からは、野面積みによる石垣も検出されている。建物跡では掘立柱建物跡と竪穴のある建物跡が検出されており、平場から柱穴が 2,587 基検出されているので、少なくとも 80 棟以上の建物跡が推定される。掘立柱建物跡は主要な建物、付属建物、方形建物の三群に分けられ、主要な建物は南西に庇を持つ。その他ではカマド状焼土遺構が検出されている。遺物は陶磁器、金属製品、古銭、石製品、木製品、炭化穀類などである。中でも陶磁器が最も多く、明代の白磁、青磁、染付や国産の瀬戸・美濃の椀、皿類で、16 世紀後半の遺物が中心になっている。

6. 金館跡に係わる伝承について

金館跡について記載されている文献は、現在のところ見つけることができない。伝承では、旧地権者の山上惣一氏によると、遺跡は周辺の住民からは「金館（こんだて）」あるいは「金様（こんさま）」と呼称されている場所ということである。また滝名川の流域に藤原氏が勢力を持つ以前に、金の採取のため平泉から入植してきた人々がいた、という伝承もあるようだが、本遺跡との係わりは不明で、産金について文献に見られるのは近世になってからのようである。そこで遺跡名について「かねだて」とする読み方もあるようだが、今回の発掘調査にあたり、「こんだて」とする読み方を採った。それ以外の伝承については収集するに至っていない。また、かつて山上氏が遺跡内でりんごを栽培するために苗木を植えた際に、「金」と墨書された素焼きの土器を見つけ、紫波町の文化財調査委員であった佐藤正夫氏に預け、見てもらったという話を伺っている。

参考・引用文献

- 岩手県企画開発室 1975 「北上山系開発地域 土地分類基本調査 日誌」
- 岩手県教育委員会編 1986 「岩手県の城館跡」『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県文化財調査報告書第 82 集）
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1985 『岩手の遺跡』
- 1993 『下川原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 122 集）
- 1995 『西田東遺跡発掘調査報告書』（第 221 集）
- 1997 『山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書』（第 255 集）
- 紫波町教育委員会 1963 『善知鳥館発掘調査報告書』
- 1978 『紫波町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ—』（紫波町文化財調査報告書第 26 集）
- 1986 『比爪館遺跡—昭和 60 年度第 7 次発掘調査報告書』
- 2000 比爪館第 24 次発掘調査現地説明会資料
- 『紫波町史』



第5図 周辺の道跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
1	南伝法寺中屋敷	散布地	土師器、須恵器
2	小屋敷	散布地	土師器
3	和田橋	集落跡	
4	下二合	散布地	土師器、須恵器
5	上戸	散布地	土師器、須恵器
6	宮手	散布地・経塚・寺院	縄文土器、土師器
7	若宮	散布地	土師器
8	作岡	散布地	土師器
9	升沢極楽寺	散布地	縄文土器(中～後期)、土師器
10	升沢久保	散布地	土師器、須恵器
11	升沢田中	散布地	土師器
12	熊田	散布地	須恵器
13	弥勒地	散布地	縄文土器、土師器
14	蓮田Ⅱ	散布地	土師器
15	石田Ⅰ	散布地	土師器
16	上平沢川原	集落跡	土師器
17	石田Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器
18	田面木Ⅰ	散布地	土師器
19	上戸Ⅱ	散布地	土師器
20	上戸Ⅲ	散布地	土師器
21	上戸Ⅳ	散布地	土師器
22	栞花	散布地	土師器
23	栞花Ⅱ	散布地	土師器、須恵器
24	馬場	散布地	土師器
25	東馬場	散布地	土師器、須恵器
26	南馬場	駅家跡	
27	栗田	集落跡	土師器、須恵器
28	上平沢新田	集落跡	土師器
29	野中	散布地	土師器
30	上竹林Ⅰ	散布地	須恵器
31	日の輪月の輪形	池跡	
32	北田	散布地	
33	宮手越場	散布地	土師器、須恵器
34	日詰上新田Ⅰ	散布地	土師器
35	宮手追分Ⅲ	散布地	土師器、須恵器
36	宮手追分Ⅱ	散布地	縄文土器、石器、土師器、須恵器
37	追分	散布地	
38	宮手追分Ⅳ	散布地	須恵器
39	日詰七久保	散布地	須恵器
40	日詰上新田	散布地	土師器
41	七久保	窯跡	土師器、須恵器
42	杉の上Ⅲ	集落跡	土師器、須恵器
43	川原毛瓦窯跡	窯跡	向鶴紋軒丸瓦、軒平瓦
44	平坊Ⅲ	集落跡	土師器
45	平坊Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器
46	漆田	集落跡	土師器
47	平坊Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器
48	蓮沼Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器
49	蓮沼Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器
50	川原毛	集落跡	土師器、須恵器
51	杉の上Ⅰ	窯跡	土師器、須恵器
52	古屋敷	散布地	
53	新田	窯跡	土師器、須恵器
54	杉の上Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器
55	沼田	散布地	土師器、須恵器
56	草刈中屋敷	散布地	縄文土器、土師器
57	河岸場	渡し場跡	
58	日詰石田	散布地	
59	間木沢	散布地	
60	犬吠森	散布地	
61	日詰下丸森	散布地	土師器
62	西裏	散布地	土師器
63	田頭	散布地	
64	花立	散布地	
65	伝源勝寺跡	寺院跡	
66	田面木Ⅱ	散布地	土師器
67	安倍道	街道跡	

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
68	関沢Ⅰ	散布地	土師器
69	関沢Ⅲ	散布地	縄文土器、土師器
70	関沢Ⅱ	散布地	土師器
71	だんご塚	塚	
72	浦田	散布地	
73	新山古墳	古墳	
74	新山神社境内	散布地・寺院跡	縄文土器(中～後期)、鏡、掛仏
75	内川	散布地	須恵器
76	土館百目木	散布地	須恵器
77	金田Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器
78	金田Ⅲ	集落跡	土師器
79	土館田屋	集落跡	土師器、須恵器
80	小林	散布地	土師器
81	新里	散布地	土師器
82	中島	散布地	土師器、須恵器、石斧
83	平沢野田Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器
84	南七合Ⅱ	散布地	土師器
85	南七合Ⅰ	散布地	土師器
86	宝木	散布地	土師器
87	平沢野田Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
88	六本松	散布地	土師器
89	平沢字館Ⅰ	散布地	縄文土器、石器、土師器
90	平沢桧Ⅰ	散布地	須恵器
91	平沢幅Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器
92	平沢桧Ⅱ	散布地	土師器
93	平沢幅Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
94	平沢四折	散布地	土師器
95	平沢越場Ⅰ	散布地	土師器
96	平沢越場Ⅱ	散布地	土師器
97	平沢堤頭Ⅱ	散布地	土師器
98	平沢越場Ⅲ	散布地	須恵器
99	平沢桧Ⅴ	散布地	土師器
100	平沢桧Ⅲ	散布地	縄文土器、石器、土師器、須恵器
101	平沢堤頭Ⅰ	散布地	縄文土器、須恵器
102	平沢境田Ⅱ	散布地	土師器
103	平沢新田Ⅱ	散布地	土師器、須恵器
104	平沢新田Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、窯跡
105	平沢境田	散布地	土師器
106	平沢境田Ⅲ	散布地	須恵器
107	桜町下野沢	散布地	土師器
108	桜町上野沢	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
109	日詰下野沢	散布地	
110	桜町中桜Ⅰ	散布地	縄文土器、石器、土師器
111	日詰牡丹野	散布地	土師器
112	平沢松田	散布地	土師器
113	平沢松田Ⅲ	散布地	土師器、須恵器
114	桜町田頭	散布地	土師器、須恵器
115	北日詰下藪	散布地	土師器
116	北日詰外谷地	散布地	土師器、須恵器
117	北日詰外谷地Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
118	北日詰外谷地Ⅱ	散布地	縄文土器、石器、土師器
119	平沢佐藤部	散布地	土師器
120	平沢滝名川Ⅰ	散布地	土師器
121	平沢滝名川Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器
122	北日詰外谷地Ⅷ	散布地	土師器
123	北日詰外谷地Ⅶ	散布地	石器
124	北日詰外谷地Ⅵ	散布地	土師器
125	北日詰外谷地Ⅴ	散布地	石器
126	北日詰外谷地Ⅳ	散布地	石器
127	北日詰外谷地Ⅲ	散布地	土師器、陶器
128	北日詰八掛	散布地	土師器、須恵器
129	北日詰東ノ坊Ⅰ	散布地	土師器、須恵器、かわらけ
130	北日詰東ノ坊Ⅲ	散布地	かわらけ
131	北日詰東ノ坊Ⅱ	散布地	土師器
132	南日詰大銀Ⅰ	散布地	土師器
133	北日詰下東ノ坊	散布地	土師器、白磁
134	北日詰城内Ⅰ	散布地	土師器、須恵器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
135	南日詰大銀Ⅱ	散布地	土師器、須恵器	161	南日詰隆沼Ⅱ	散布地	土師器
136	南日詰小路口Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	162	南日詰宮崎	散布地	土師器
137	南日詰小路口Ⅲ	散布地	土師器	163	南日詰田中Ⅰ	散布地	須恵器
138	南日詰小路口Ⅱ	散布地	土師器、須恵器	164	南日詰	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
139	大巻長沢尻	散布地	縄文土器(後期)、土師器	165	南日詰田中Ⅱ	散布地	土師器
140	大巻間田	散布地	土師器	166	片寄越田	散布地	縄文土器(中・後期)、土師器
141	彦部久保	散布地	土師器	167	南日詰滝名川Ⅰ		
142	彦部赤坂古墳	古墳		168	大淵新田堰Ⅷ	散布地	土師器
143	御在所	集落跡・墳墓		169	南日詰滝名川Ⅲ		
144	十二神古墳群	集落跡	人骨(頭蓋骨、胸骨)、玉	170	南日詰滝名川Ⅵ	散布地	土師器
145	片寄上久保	建物跡	須恵器、柱脚	171	南日詰滝名川Ⅳ		
146	沖田Ⅰ	散布地	土師器	172	大淵新田堰	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
147	片寄中島	散布地	土師器、須恵器、石鏃	173	大淵谷地田	散布地	土師器
148	片寄	散布地	縄文土器、土師器	174	大淵谷地田南		
149	四ツ星	散布地		175	南谷地		
150	南日詰長根	散布地	縄文土器、土師器	176	下越田Ⅱ	散布地	
151	南日詰野原	散布地	土師器、須恵器	177	下越田Ⅰ	散布地	
152	南日詰梅田	散布地	土師器	178	南日詰八坂沢	散布地	須恵器
153	南日詰長根Ⅲ	散布地	縄文土器、石器、土師器	179	下川原Ⅰ	散布地	土師器
154	南日詰川原	散布地	土師器	180	西田東	集落跡	土師器
155	南日詰京田Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	181	下川原Ⅱ	集落跡	土師器
156	南日詰梅田Ⅱ	散布地	土師器	182	下越田Ⅲ	集落跡	土師器
157	南日詰京田Ⅲ	散布地	土師器	183	寺沢	散布地	縄文土器
158	南日詰京田Ⅱ	散布地	土師器、須恵器	184	小深田	散布地	土師器
159	南日詰蔭沼Ⅰ	散布地	土師器	185	是信房墓所		
160	伝蛇塚	散布地		186	元町	散布地	土師器、須恵器

第2表 紫波町内の城館遺跡

番号	名称	別称	所在地	時代	遺構・遺物など	城主など(文献)・その他
187	山館		上松本字内分	中世		
188	弥勒地館		土館字弥勒地	中世	郭、空堀、土塁	
189	笹木館		土館字田面木	中世	井戸跡、空堀	
190	泉館	泉屋敷	宮手字泉屋敷	中世	堀	
191	松本館		下松本字下二合	中世	堀	松本清兵衛(紫波郡誌)
192	谷地館		宮手字谷地館	古代	堀、土師器	古代
193	愛宕山館		土館字和山	中世	郭、土塁、空堀	
194	寺館	源勝寺館	土館字関沢	中世	郭、空堀、土塁、園池	
195	金田館	ジサヤ	土館字金田	中世	郭、堀	
196	浦田館		土館字浦田	中世	郭、堀、土塁	
197	笹森館		土館字和山	中世	郭、空堀、土塁	
198	柳田館	片寄城、吉浜衛館、中野館	片寄字中平	中世	郭、空堀、土塁、園池、陶器、古銭	中野康実(内史略)、紫波町指定史跡、東北自動車道関連S50・51調査
199	墳館	古館、漆館	片寄字漆立	中世		東北自動車道関連S50・51調査
200	上久保館		片寄字上久保	中世	空堀	
201	金館		南日詰字梅田	中世	墨書土器	H12調査(本報告遺跡)
202	稲藤館	フクベ館	稲藤字田屋	中世		稲藤大炊(奥南落穂集)
203	平沢館		平沢字館	古代	土師器	平安、築田大学(奥南落穂集)
204	太郎館		平沢字の場	中世		
205	久々館跡		宮手字久々館	中世	空堀、土塁	
206	上竹林Ⅱ		中島字上竹林	古代	土師器	
207	陣ヶ岡		宮手字陣ヶ岡	古代	堀、土塁	源頼朝(吾妻鏡)、紫波町指定遺跡
208	柳原		二日町柳原		土師器	
209	泰衛首洗い池		陣ヶ岡	中世		
210	中島城		中島字上長根	中世		中島安将(奥南落穂集)
211	戸部御所	西御所	二日町字南七久保	中世		
212	高水寺城	郡山城、斯波館	二日町字古館	中世	郭、空堀、土塁、井戸	斯波家長、中野康実(内史略)、紫波町指定史跡、S48・49・58・59調査
213	吉兵衛館		二日町字向山	中・近世	陶磁器	高田吉兵衛(内史略)
214	犬吠森館	東館	犬吠森字沼端	中世	郭、空堀、土塁	東民部(紫波郡誌)
215	遠山館		遠山字新田	中世		
216	星山館		星山字間野村	中世	郭、空堀	星山左馬の丞(奥南盛風記)
217	大日堂		北日詰字大日堂			東北新幹線関連S50調査
218	北条館		北日詰字城内	中世	土師器	北条氏(紫波町史)
219	比爪館	樋爪館	北日詰字箱清水	中・近世	堀、竪立柱建物跡、井戸跡、土師器、須恵器、かわらけ	藤原俊衛(吾妻鏡)、10・12世紀、紫波町指定史跡S40・44・47・49・57・60・62~H12調査
220	梅ノ木館		大巻字梅ノ木	中世		(紫波郡誌)
221	大巻館	河村館	大巻館字花立	中世	空堀、郭、土塁、井戸	河村秀興、紫波町指定史跡
222	赤川館		大巻字長沢尻	中・近世		葛原義敬(長徳寺文書)
223	善知鳥館		南日詰字滝名川	古代	空堀、土塁、柵列、土師器	古代、紫波町指定史跡、S36調査
224	西田館		大淵字西田	古代・中世	縄文土器、堀、土塁、郭	東北新幹線関連S50~52調査 H1調査
225	館盛		彦部字機械	中・近世		
226	機織館	彦部館	彦部字機械	中世	陶磁器	彦部氏(彦部村誌)

Ⅲ 野外調査と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) 調査区の設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標軸（第Ⅹ系）に基づいた基準点2点と補助点4点の合わせて6点を設定し、平面直角座標軸（第Ⅹ系）の軸線に合わせて調査区の設定をした。設定した基準点と補助点の座標値及び水準点は下記の通りである。

基準点1	X = - 52,380.000	Y = 26,580.000	H = 111.612 m
基準点2	X = - 52,380.000	Y = 26,600.000	H = 111.790 m
補助点1	X = - 52,360.000	Y = 26,580.000	H = 112.057 m
補助点2	X = - 52,400.000	Y = 26,600.000	H = 111.195 m
補助点3	X = - 52,412.000	Y = 26,600.000	H = 109.491 m
補助点4	X = - 52,412.000	Y = 26,620.000	H = 110.541 m

基準点1と基準点2を基点として、20 m × 20 mの大グリッドのメッシュをかけ、さらに大グリッドを16分割し、5 m × 5 mの小グリッドを調査区的全範囲にかけた。グリッド名は調査区の北西側を起点として、大グリッドは東西をA～D、南北をI～IV、小グリッドは北西隅から順次東に1～16と付けた。グリッドの呼称については、大グリッドと小グリッドの組み合わせにより、「IA1」とか「IB16」というように呼んでいる。

(2) 遺構の名称

野外調査では、それぞれの遺構について「1号土坑」、「2号焼土遺構」というように、遺構ごとに検出した順番に数字を付した。柱穴状小土坑についてはppの名称を使用した。また土坑については室内整理の段階で再検討し、名称を変更しているが、旧遺構名は次の通りである。10号土坑－5号土坑、11号土坑－6号土坑、13号土坑－7号土坑、14号土坑－8号土坑、23号土坑－9号土坑、24号土坑－10号土坑、25号土坑－11号土坑。

(3) 粗掘り、遺構検出、精査

任意に設定したトレンチで、土層の堆積状況や遺構・遺物の埋存状況を観察した。その結果、表土、耕作土の下層はすぐに地山となり、遺構が存在すること、耕作土である暗褐色土中に遺物が含まれるが、部分的で僅少であることを確認した。そこで地山であるIV層、もしくは遺物を包含する暗褐色土であるⅢ層の上層まで、表土と耕作土を重機を用いて除去し、遺構検出を行った。また調査区の南部はトレンチを入れた際に、地山面が落ち込み、礫層が厚く堆積していることが確認できたため、ほぼ南北方向に3本のトレンチを重機によって入れた。そこで断面から堀跡を検出したが、現代に盛られたと思われる礫層は重機で除去した。検出された遺構は2分法・4分法を用いて精査を行い、必要な記録はフィールドカードに記録した。遺構の平面実測は小グリッド（5 × 5 m）をさらに1 × 1 mのメッシュに区切り、簡易遣り方測量で行った。

遺構の実測図の縮尺は1/20を原則とし、必要に応じて任意の縮尺の図面を作成した。曲輪、堀跡の平面図については光波トランシットを使用して実測している。また調査終了後に写真測量による地形図・遺構図を作成している。

(4) 写真撮影

写真撮影は6×7判モノクロ・35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル用のカメラを各1台ずつ使用し、遺構の平面・断面・遺物出土状況を中心に撮影を行った。他にポラロイドカメラをメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また調査終了後には写真測量に伴う、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。

2. 室内整理

(1) 整理作業の経過

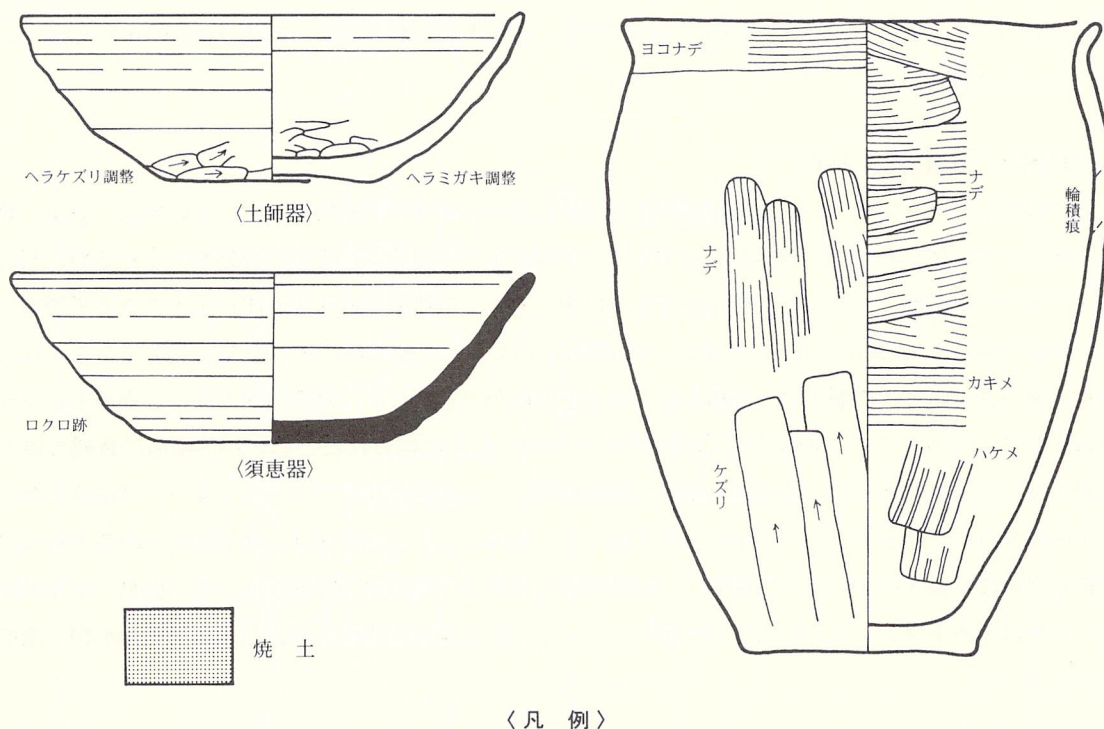
室内整理作業は平成12年11月8日～平成13年1月31日に行っている。作業の手順は、遺構については調査現場で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース図版の作成の順に進めた。遺物については、接合、復原を行った後、仕分け・登録と併行して実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成を順に進めた。また、これらの作業とともに原稿を作成し、報告書としている。

(2) 遺 構

遺構図版の縮尺は、曲輪が平面図が625分の1、断面図が100分の1、堀跡については平面図・断面図とも125分の1を基本としている。柱穴列、柱穴状小土坑は100分の1、溝跡については平面図は100分の1だが、断面図は50分の1である。また土坑、焼土遺構は40分の1を原則としている。図面にはそれぞれスケールを付している。遺構写真の縮尺は不定である。

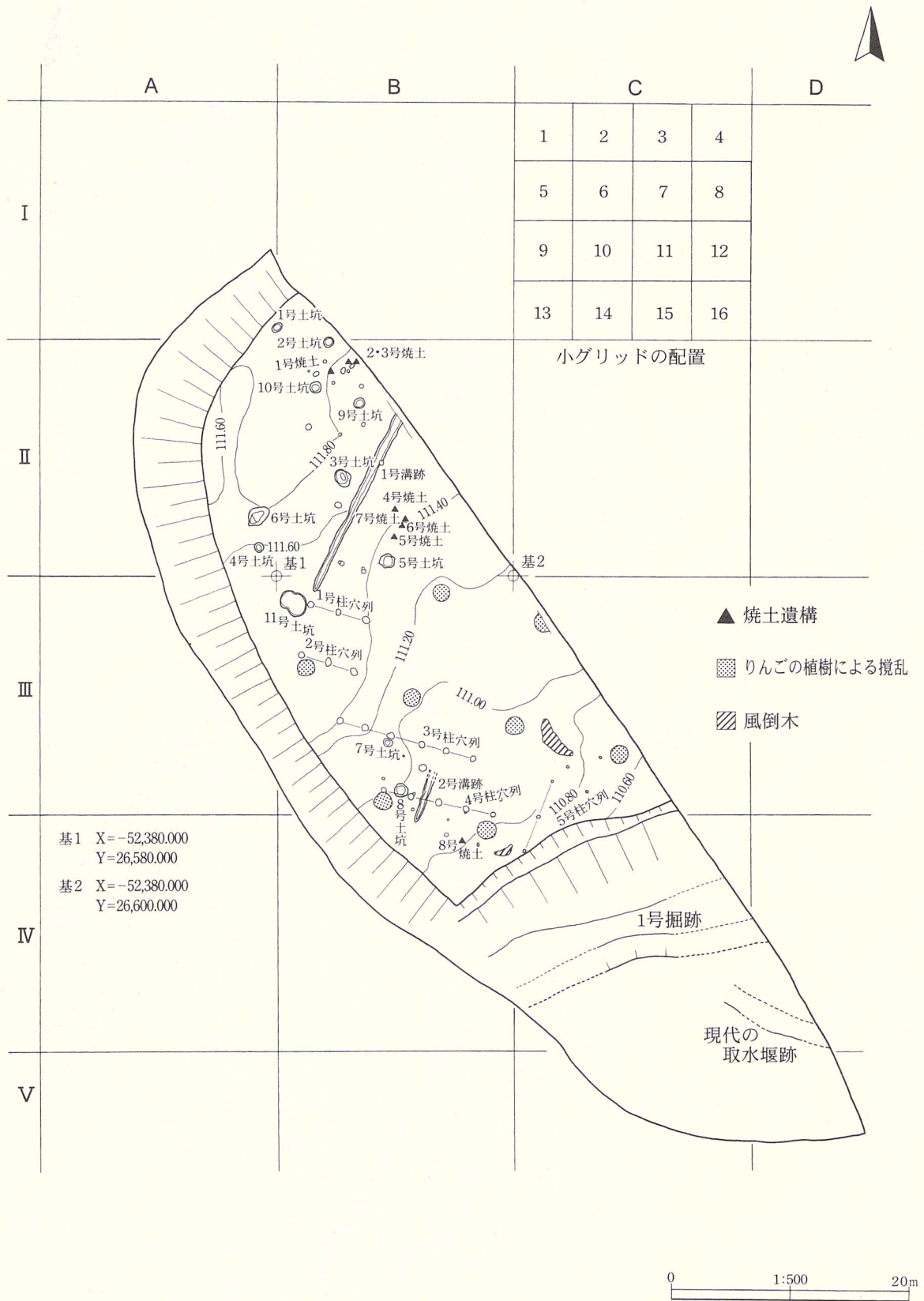
(3) 遺 物

遺物の図版の縮尺は、すべて2分の1で掲載している。写真図版の縮尺も図版に準じている。遺構・遺物の図版に使用した凡例は以下の通りである。





第6図 金館跡要図



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1. 曲輪

調査区の大部分を占める台形状に突き出た平坦部は、南側から1号堀跡が検出され、また東側にも堀跡と想定される長さ約40mにわたる窪みが認められた。よって西側を滝名川が流れ、南と東側を堀によって区切られる構造と判断し、平坦部を曲輪として報告する。また曲輪から、滝名川方向に続く傾斜面についても併せて記述する。

1号曲輪

〈形態・規模〉調査の範囲が西側の約半分であったために、全体を詳細に把握したわけではないが、形状は不整な馬蹄形で、規模は現状では東西に約45m、南北が約55mで、面積が約2,000㎡と推定される。今回は西側半分の約1,000㎡を調査している。傾斜面については滝名川がすぐ側に迫るため、すべての表土を除去することは不可能であった。そこでトレンチを2本入れ、断面を確認した。北側の断面（トレンチ1）は実効法高で約8m、垂直高で4mで、南寄りの断面（トレンチ2）は実効法高が4.1mで、垂直高が4.5mである。しかし傾斜面は滝名川の氾濫や流路の変化により、水流で削られている可能性が高く、かつての形態や規模は現状とは異なるものと考えられる。特にトレンチ2の状況から、西側は特に削平が激しかったと推定される。また土塁などの普請の痕跡は確認していない。しかし滝名川の洪水を防ぐために土を盛った際に、平坦部をかなり削平したらしいこと、また滝名川によって削平されていることと併せると、普請の痕跡は消滅してしまった可能性も残る。

〈埋土〉基本土層の項で述べた通り、表土、黒褐色シルトである耕作土を除去すると地山である黄褐色粘土質シルト層となる。傾斜面については、トレンチ1では、表土の下層の黒褐色シルトが多少厚く堆積しているが、その下層は地山である黄褐色粘土質シルトとなる。またトレンチ2ではさらに下層に灰白色粘土質シルト、礫層と堆積していることを確認している。人為的な堆積の状況は認められない。

2. 堀跡

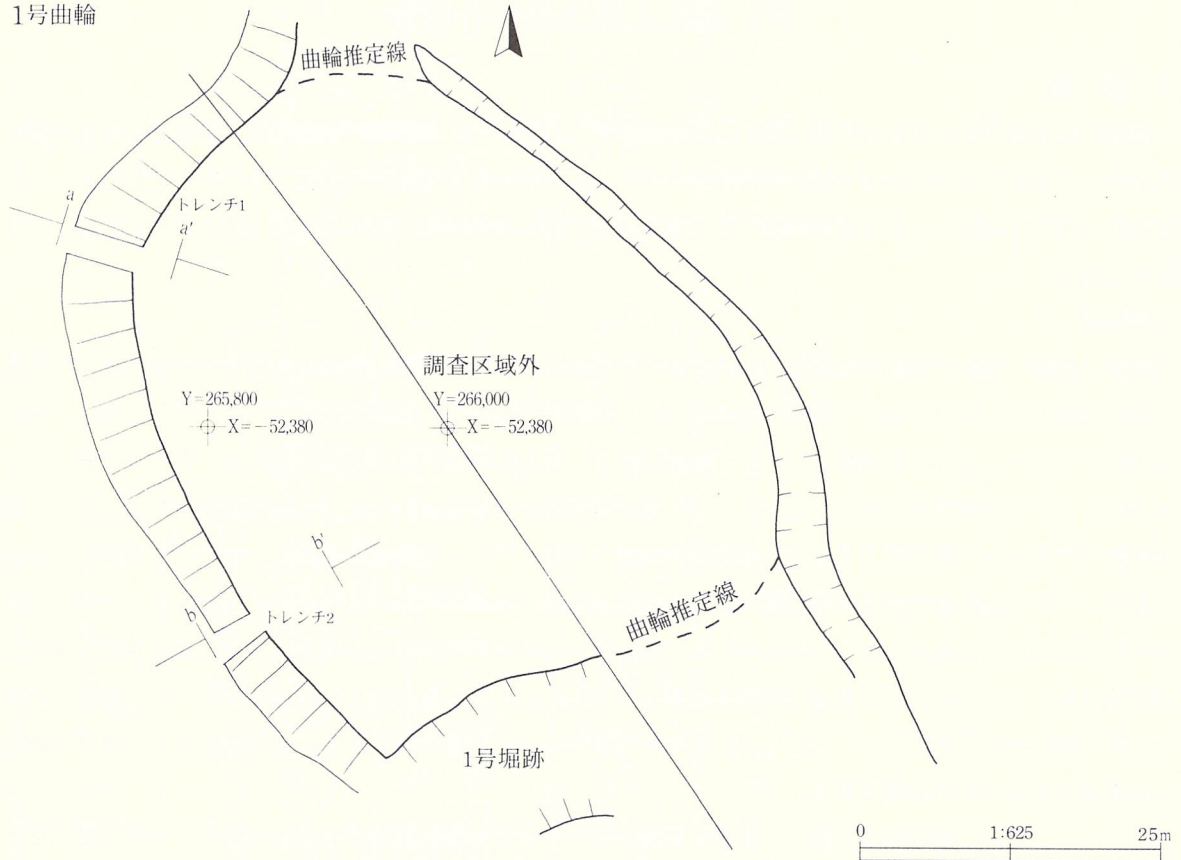
1号堀跡

〈位置〉調査区南東部のIVB8から12グリッド付近からIVCグリッドにかけて、曲輪の南東部に位置する。

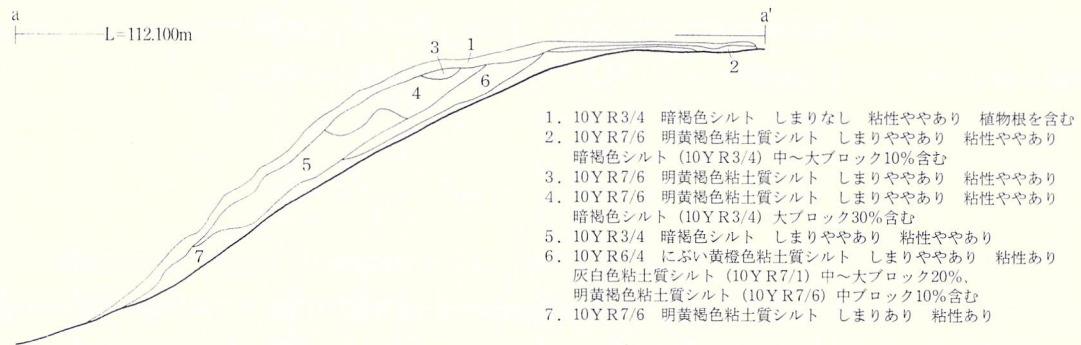
〈検出状況〉調査時には完全に埋まっており、表面からは確認できない状態であった。調査区南側であるIII Cグリッドで試掘トレンチを入れた際に、地山であるIV層黄褐色粘土質シルト層が、曲輪の辺縁と同様に、急な傾斜で落ち込んでいることを確認した。そこで堀が南側に走っていることを想定して、調査区の最南端までトレンチを入れたところ、IVC11グリッドでの断面（堀跡断面2）から、堀の南側の壁にあたる立ち上がりを確認した。

〈規模・形態・方向〉東端部から西側の調査区境までの約21mの部分を検出した。東端部は滝名川に向かって開放し、調査区外となる北西に向かってさらに延びる。方向は西南西―東北東であるが、調査区境付近では、緩やかに南に屈曲する可能性がある。堀幅は最大で12.5m、深さは最大で2.1mを測る。堀の南側の約3分の2は砂礫層を掘り込み、その上から粘土を貼って構築されている。しかし滝名川の氾濫や現代の取水堀の埋め込みによってかなり破壊されており、現状で粘土を貼っていることを確認できたのは部分的であった。南側の堀の外壁も粘土を貼っていることによって立ち上がりを確認しているが、確実に検出できたのは長さ約2mほどの部分である。またその外壁は上部が削平されている可能性もあり、実際は幅、深さ

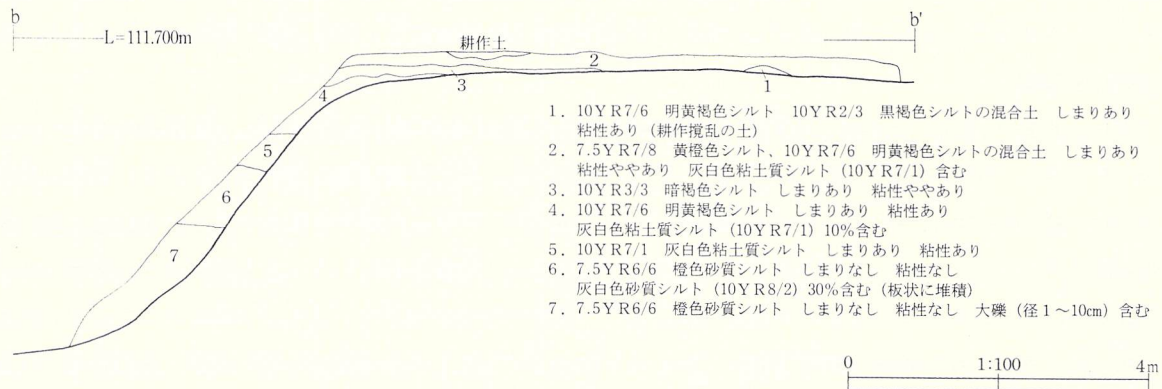
1号曲輪



曲輪斜面部トレンチ1断面(北側)



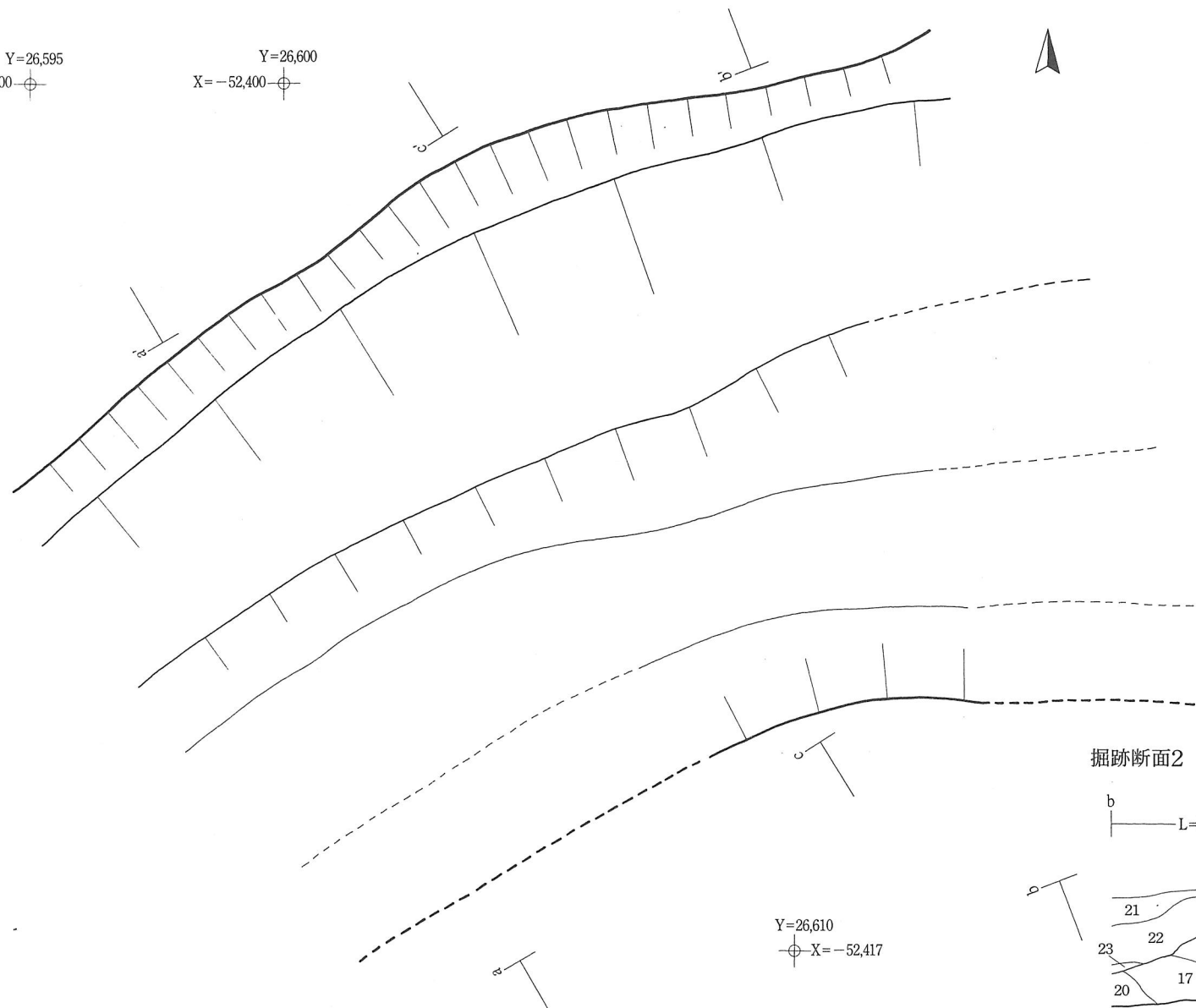
曲輪斜面部トレンチ2断面(南側)



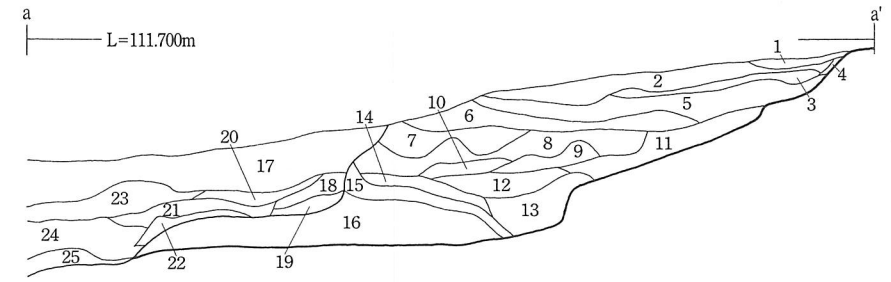
第8図 1号曲輪

Y=26,595
X=-52,400

Y=26,600
X=-52,400

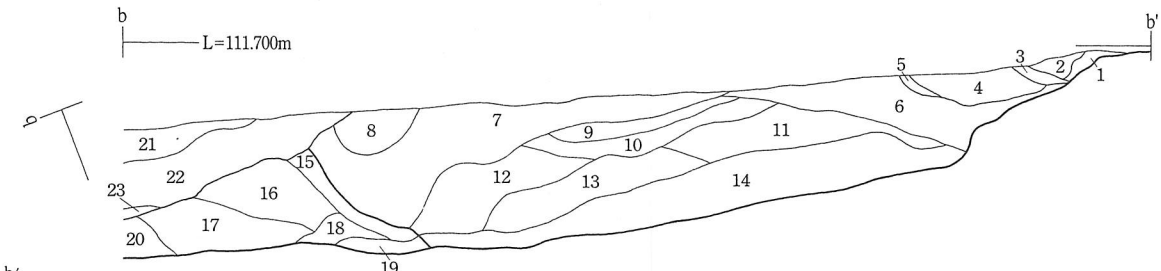


掘跡断面1

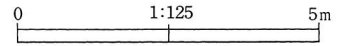
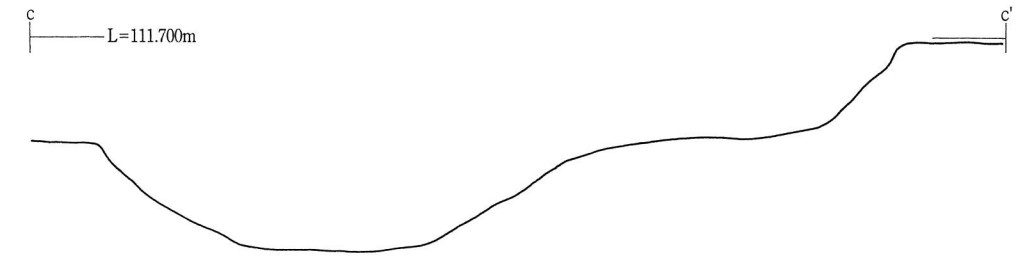


- a-a'
- 10Y R7/6明黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性ややあり 黒褐色シルト (10Y R2/3) が20%混じる。
 - 10Y R3/4黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややなし 暗褐色シルト (10Y R3/4) が極小粒で20%混じる 黒褐色シルト (10Y R2/3) が大ブロックで20%混じる。
 - 2層に似るが、黒褐色シルトは含まれない。
 - 10Y R7/6明黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり 灰白色粘土質シルト (10Y R7/1) が中ブロックで20%混じる。
 - 5mm~10cmの礫と10Y R5/6黄褐色砂土が混じる砂礫層 しまりなし 粘性なし。
 - 5mm~5cm大の礫と10Y R5/6黄褐色砂土が混じる砂礫層 礫は板状に重なり堆積している。
 - 6層に似る砂礫層だが、礫の大きさが5cm大に揃う。砂土の割合が高い。
 - 6層に似る砂礫層だが、20cm大の礫も混じる。砂土の割合が高い。
 - 10Y R7/1灰白色粘土質シルトと10Y R4/4褐色砂質土が混じり合う層 しまりややあり 粘性ややあり 1cm~20cm大の礫が30%混じる 部分的に赤褐色に変色している。
 - 6層に似る砂礫層だが、さらに砂土の割合が高い。
 - 6層に似る砂礫層だが、20cm大の礫が多く、密に堆積している。
 - 5層に似る砂礫層だが、20cm大の礫も含まれる。
 - 12層に似るが、砂土の割合が低く、特にしまりがなく崩れやすい。
 - 10Y R4/4褐色粘土と10Y R5/6黄褐色の砂土と1cm~10cm大の礫が混じる層 しまりややあり 粘性ややなし。
 - 1cm大の礫と10Y R5/6黄褐色砂土が混じる砂礫層 しまりややなし 粘性なし 赤褐色に変色している。
 - 15層に似るが、礫が5mm~10cm大の礫である。
 - 10Y R3/4暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 黄褐色シルト (10Y R5/6) が大ブロックで20%混じる 明黄褐色粘土質シルト (10Y R7/6) が1%混じる。
 - 17層に似ているが、5mm~10cm大の礫が5%混じる。
 - 10Y R黄褐色砂質シルト しまりややなし 粘性なし 暗褐色シルトが20%混じる 5cm大の礫が混じる。
 - 10Y R5/6黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし。
 - 19層に似るが、暗褐色シルトが30%混じる 30cm大の礫も混じる。
 - 10Y R4/4褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり 部分的に黄褐色砂土 (10Y R5/6) 混じる。
 - 17層に似るが、20cm大の礫も含まれる。
 - 15層に似るが、30cm大の礫も含まれる。
 - 10Y R2/3黒褐色粘土質シルト しまりややなし 粘性ややあり 黄褐色砂土 (10Y R5/6) が10%混じる。 5cm大の礫が3%混じる。
- 1~16層は堀跡の埋土 17~25層は土地の改変による現代の攪乱

掘跡断面2



- b-b'
- 10Y R3/4暗褐色シルト しまりあり 粘性あり 明黄褐色シルト (10Y R6/8) が部分的に大ブロックで20%混じる。
 - 10Y R5/8黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性なし 暗褐色シルト (10Y R3/4) が小ブロックで5%混じる。
 - 10Y R5/8黄褐色砂土 しまりなし 粘性なし 5mm~3cm大の礫が10%混じる。
 - 5mm~10cm大の礫と10Y R5/8黄褐色砂土が混じる砂礫層 しまりなし 粘性なし
 - 4層に似る砂礫層だが、5mm~20cm大の礫が混じる。
 - 4層に似る砂礫層だが、10cm大の礫が揃っている。
 - 10Y R4/4褐色砂土 しまりなし 粘性なし 層に沿って1cm~3cm大の礫が板状に堆積する部分あり。
 - 10Y R5/8黄褐色砂土 しまりなし 粘性なし 5mm以下の礫が板状に堆積する部分あり。
 - 5層に似る砂礫層だが、赤褐色に変色している部分がある。
 - 4層に似る砂礫層だが、5mm~3cm大の礫が混じる。
 - 10Y R5/6黄褐色砂土 しまりなし 粘性なし
 - 8層とはほぼ同じ砂層であるが、1mm以下の暗褐色の礫が板状に堆積する部分あり。
 - 5mm~20cm大の礫と10Y R5/8黄褐色砂土が混じる砂礫層 しまりなし 粘性あり
 - 13層と似ている砂礫層だが、2cm大の礫が板状に堆積している部分がある。
 - 10Y R6/1褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり 上部と下部は赤褐色に変色している。
 - 5mm~10cm大の礫と10Y R5/6黄褐色砂土が混じる砂礫層であるが、他の砂礫層に比べしまりがある 粘性なし
 - 10Y R4/4褐色粘土質シルト しまりややなし 粘性あり 黒褐色シルト (10Y R2/3) が大ブロックで20%混じる。
 - 10Y R3/4暗褐色シルト しまりややなし 粘性ややなし 明黄褐色シルト (10Y R6/8) が大ブロックで5%混じる 1cm~20cm大の礫が15%混じる。
 - 10Y R3/4暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややなし 明黄褐色シルト (10Y R6/8) が小ブロックで2%混じる 1cm~5cm大の礫が3%混じる。
 - 5mm~20cm大の礫と10Y R5/6黄褐色砂土が混じる砂礫層 しまりややなし 粘性あり 部分的に赤褐色に変色している。
 - 10Y R3/4暗褐色シルトと10Y R5/6黄褐色砂土と1cm~20cm大の礫が混じる砂礫層 しまりややなし 粘性あり
- 1~14層は堀跡の埋土 15層は堀跡の粘土を貼る部分 16~20層は地山 21~23層は土地の改変による現代の攪乱



第9図 1号堀跡

ともに規模が大きくなるのかもしれない。底面はほぼ平坦ではあるが、曲輪から落ち込む北側の傾斜面は途中で傾斜が緩やかになっており、傾斜が二段に形成されている。南側の外壁も同じ様な形態であったことも推測される。

〈埋土〉北側は黄褐色シルト、暗褐色シルトが堆積しているが、ほとんどが礫層、砂層からなる。埋土には赤褐色に変色している部分があり、水性堆積を示す。滝名川の氾濫によるものと推測される。また埋土より上部には人為的に堆積した礫層が見られたが、これは現代の造成の際に盛られたと考えられる。

〈出土遺物〉ない。

〈時期〉遺物がないため明確な時期は不明だが、館が機能していた時期のものと考えられる。

3. 柱穴列

1～4号柱穴列は、ⅡBグリッドからⅢBグリッドにかけて、Ⅳ層から規模、埋土の状況が似る柱穴が直線上に並んで検出された。4基の柱穴列は約4.5mのほぼ同じ間隔で位置しており、方向も微妙に異なるため、掘立柱建物跡を構成する可能性もあるが、柱穴列として報告する。また遺物がなく、時期を特定することができない。現代のものである可能性も残る。

1号柱穴列

〈位置〉ⅢB1、2グリッドにかけて位置する。南側には2号柱穴列が並ぶ。

〈規模〉pp9、pp10、pp11の3基の柱穴状小土坑を全長4.80mにわたり、ほぼ等間隔で検出した。各柱穴間の距離はpp9－pp10が2.26m、pp10－pp11が2.54mを測る。

〈方位〉E－14°－Sである。

〈柱穴〉3基の柱穴の検出面での規模はpp9は64cm×58cm、pp10が61cm×54cm、pp11が57cm×55cm、深さはpp10が23.1cm、pp11が26.8cm、pp11が23.7cmである。形状はほぼ円形である。pp10とpp11からは柱痕の可能性ある窪みが検出された。埋土は暗褐色シルトに、明黄褐色粘土質シルトが小から中ブロックで2～20%程度混じるものである。

〈出土遺物〉ない。

〈遺構の性格〉出土遺物がないため時期は不明である。2号柱穴列とともに掘立柱建物を構成する可能性がある。

2号柱穴列

〈位置〉ⅢB1、2グリッドにかけて位置する。北側には1号柱穴列、南側には3号柱穴列が等間隔で並ぶ。

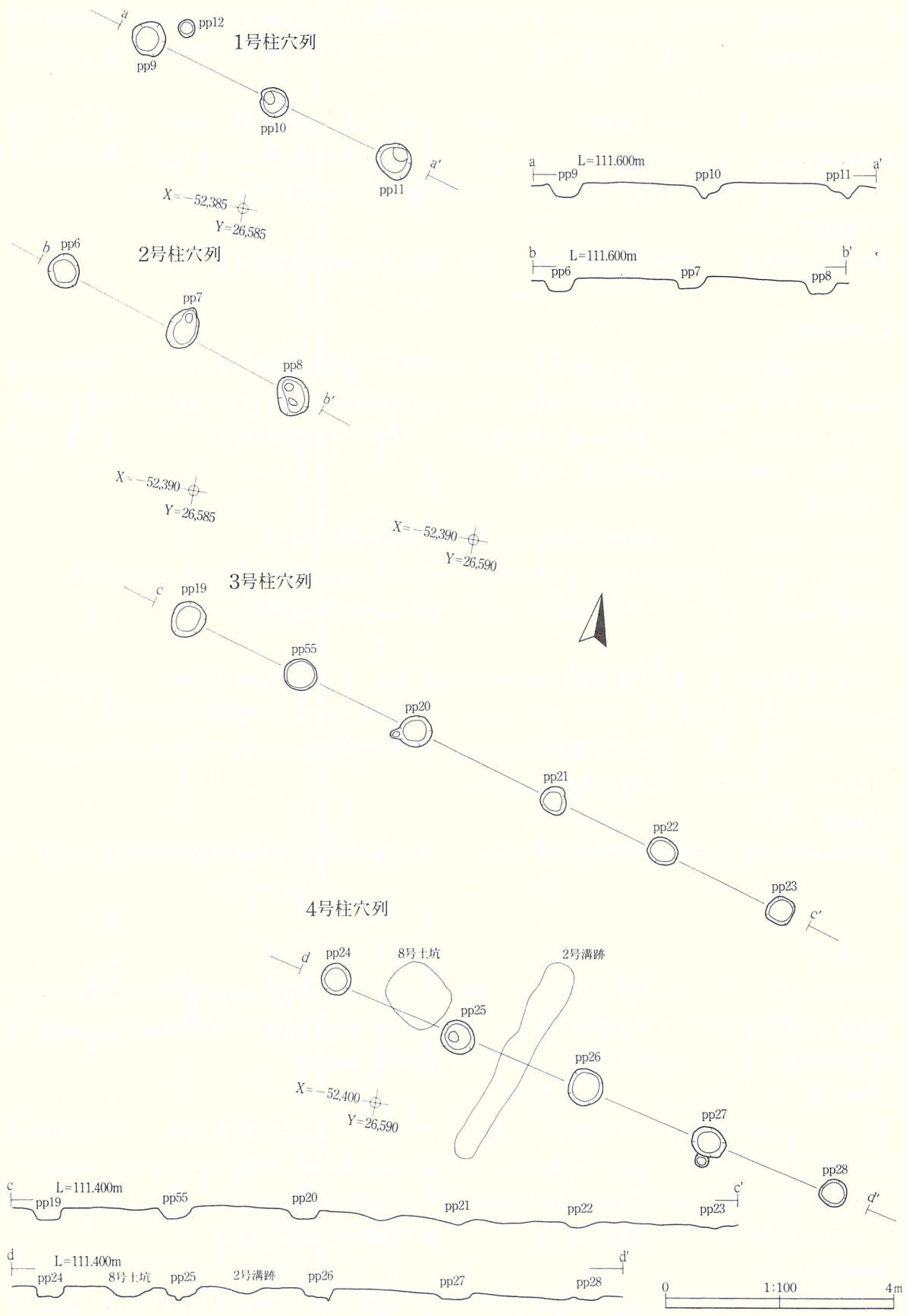
〈規模〉pp6、pp7、pp8の3基の柱穴状小土坑を全長4.77mにわたり、ほぼ等間隔で検出した。各柱穴間の距離はpp6－pp7が2.50m、pp7－pp8が2.27mを測る。

〈方位〉E－19°－Sである。

〈柱穴〉3基の柱穴の検出面での規模はpp6は60cm×57cm、pp7が76cm×55cm、pp8が58cm×54cm、深さはpp6が21.8cm、pp7が28.1cm、pp8が20.8cmである。形状はpp6が円形で、pp7とpp8は楕円形である。pp7とpp8からは柱痕の可能性ある窪みが検出された。埋土は暗褐色シルトに、明黄褐色粘土質シルトが小から中のブロックで2～20%程度混じるものである。

〈出土遺物〉ない。

〈遺構の性格〉出土遺物がないため時期は不明である。2号柱穴列とともに掘立柱建物跡を構成する可能性がある。



第10图 1~4号柱穴列

3号柱穴列

〈位置〉ⅢB 10、11、16グリッドにかけて位置する。北側には2号柱穴列、南側には4号柱穴列が等間隔で並ぶ。

〈検出状況〉Ⅳ層の黄褐色粘土質シルト層で、直線上に並ぶ暗褐色のプランを確認した。

〈規模〉pp 19、pp 55、pp 20、pp 21、pp 22、pp 23の6基の柱穴状小土坑を全長11.63mにわたり、ほぼ等間隔で検出した。各柱穴間の距離はpp 19 - pp 55とpp 55 - pp 20が2.24m、pp 20 - pp 21が2.73m、pp 21 - pp 22が2.10m、pp 22 - pp 23が2.32mを測る。

〈方位〉E - 16° - Sである。

〈柱穴〉6基の柱穴の検出面での規模はpp 19は64cm×58cm、pp 55が61cm×54cm、pp 20が57cm×55cm、pp 21が52cm×45cm、pp 22が55cm×47cm、pp 23が47cm×47cmで、深さは最深がpp 19の23.1cm、最浅がpp 21の6.9cmである。pp 20からpp 23が規模、深さともに測定値が小さくなるのは、pp 20付近より東側が耕作による攪乱の影響が大きく、検出面が多少下がっていることによるものと考えられる。形状はほぼ円形である。柱痕は検出していない。埋土は暗褐色シルトに、明黄褐色粘土質シルトが小から中のブロックで15%程度混じるものである。

〈出土遺物〉ない。

〈遺構の性格〉出土遺物がないため時期は不明である。館が成立していた時期の柵列等の可能性もある。

4号柱穴列

〈位置〉ⅢB 14、15、16グリッドにかけて位置する。北側には3号柱穴列が並ぶ。

〈検出状況〉Ⅳ層の黄褐色粘土質シルト層で、直線上に並ぶ暗褐色のプランを確認した。

〈規模〉pp 24、pp 25、pp 26、pp 27、pp 28の5基の柱穴状小土坑を全長9.54mにわたり、ほぼ等間隔で検出した。各柱穴間の距離はpp 24 - pp 25が2.41m、pp 25 - pp 26が2.40m、pp 26 - pp 27が2.38m、pp 27 - pp 28が2.35mを測る。

〈方位〉E - 12° - Sである。

〈柱穴〉5基の柱穴の検出面での規模はpp 24は54cm×51cm、pp 25が60cm×58cm、pp 26が63cm×51cm、pp 27が63cm×50cm、pp 28が49cm×48cmで、深さは最深がpp 25の20.6cm、最浅がpp 28の5.8cmである。形状はほぼ円形である。pp 25から柱痕らしい窪みを検出した。埋土は暗褐色シルトに、明黄褐色粘土質シルトが小中のブロックで15%前後混じるものである。

〈出土遺物〉ない。

〈遺構の性格〉出土遺物がないため時期は不明である。館が成立していた時期の柵列等の可能性もある。

5号柱穴列

〈位置〉ⅢC 13～ⅣC 1グリッドにかけて位置する。

〈規模〉pp 54、pp 30、pp 31の3基の柱穴状小土坑を全長6.5mにわたり、ほぼ等間隔で検出した。各柱穴間の距離は3.2mを測る。

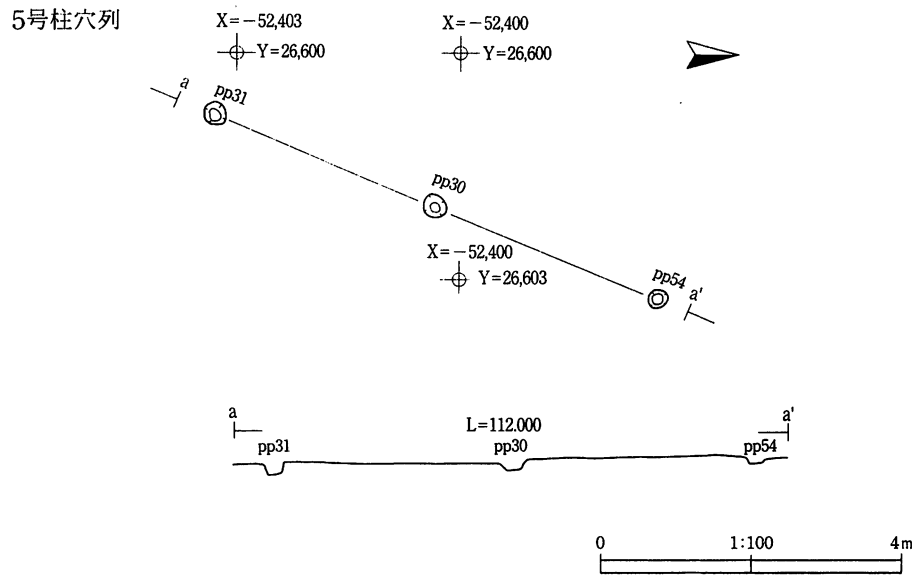
〈方位〉E - 14° - Sである。

〈柱穴〉3基の柱穴の検出面での規模はpp 54は23cm×23cm、pp 30が35cm×29cm、pp 31が41cm×33cm、深さはpp 54が10.4cm、pp 30が15.3cm、pp 31が18.3cmで、1～4号柱穴列を構成するものよ

り多少小規模である。形状はほぼ円形である。柱痕は検出していない。埋土は暗褐色シルトに、明黄褐色粘土質シルトが小から中のブロックで2～20%程度混じるものである。

〈出土遺物〉ない。

〈遺構の性格〉出土遺物がないため時期は不明である。館が成立していた時期の柵列等の可能性もある。



第11図 5号柱穴列

第3表 柱穴列柱穴観察表

1号柱穴列柱穴

No.	直径 (cm)	深さ (cm)	備考
9	61 × 61	27.9	
10	55 × 55	26.8	柱痕あり
11	67 × 58	23.7	柱痕あり

2号柱穴列柱穴

No.	直径 (cm)	深さ (cm)	備考
6	60 × 57	21.8	
7	76 × 55	28.1	柱痕あり
8	68 × 54	20.8	柱痕あり

3号柱穴列柱穴

No.	直径 (cm)	深さ (cm)	備考
19	64 × 58	23.1	
20	57 × 55	11.6	
21	52 × 45	6.9	
22	55 × 47	8.8	
23	47 × 47	7.9	
55	61 × 54	20.7	

4号柱穴列柱穴

No.	直径 (cm)	深さ (cm)	備考
24	54 × 51	18.0	
25	60 × 58	20.6	柱痕あり
26	63 × 61	15.8	
27	63 × 50	10.6	
28	49 × 48	5.8	

5号柱穴列柱穴

No.	直径 (cm)	深さ (cm)	備考
30	35 × 29	15.3	
31	41 × 33	18.3	
54	23 × 23	10.4	

4. 土 坑

合計 11 基を検出した。

1 号土坑

〈位置〉 I A 16～II B 13 グリッドにかけて位置する。

〈検出状況〉 V層で円形の黒褐色のプランを確認した。

〈規模・形態〉 規模は開口部が 84cm×71cm、底部が 64cm×57cmで深さは 18cmを測る。平面形は不整な円形である。底面は平坦で、壁は底面からなめらかに斜めに立ち上がる。底面、壁ともにV層中である。

〈埋土〉 上部は黒褐色シルトに明黄褐色粘土質シルトがブロック状に混じり、下部は明黄褐色粘土質シルトが堆積する。人為的堆積である。

〈遺物〉 ない。

〈時期〉 不明である

2 号土坑

〈位置〉 II B 1 グリッドに位置する。

〈検出状況〉 IV層で円形の黒褐色のプランを確認した。

〈規模・形態〉 規模は開口部が 93cm×87cm、底部が 74cm×71cmで深さは 26cmを測る。平面形は不整な円形である。底面はほぼ平坦で、壁は底面からなめらかに斜めに立ち上がる。底面はV層中となる。

〈埋土〉 上部は黒褐色シルトに明黄褐色粘土質シルトがブロック状に混じり、下部は明黄褐色粘土質シルトが堆積する。人為的堆積である。

〈遺物〉 ない。

〈時期〉 不明である。

3 号土坑

〈位置〉 II B 10 グリッドに位置する。

〈検出状況〉 IV層で不整形のプランを確認した。

〈規模・形態〉 規模は開口部が 148cm×124cm、底部が 113cm×95cmで深さは 20cmを測る。平面形は不整な楕円形である。底面は皿形で、壁との区別がつかない。底面、壁ともにIV層中である。

〈埋土〉 上部は黒褐色シルト、下部は明黄褐色粘土質シルトが堆積する。人為的堆積の可能性が高い。

〈遺物〉 ない。

〈時期〉 不明である。

4 号土坑

〈位置〉 II A 16 グリッドに位置する。

〈検出状況〉 IV層で円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉 規模は開口部が 76cm×74cm、底部が 55cm×52cmで深さは 33cmを測る。平面形は円形である。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。底面、壁はV層中となる。

〈埋土〉 褐色シルトを主体とし、下部は暗褐色シルト、黒褐色シルトが堆積する。自然堆積と考えられる。

〈遺物〉 ない。

〈時期〉不明である。

5号土坑

〈位置〉Ⅱ B 14 グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層で円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が130cm×120cm、底部が88cm×86cmで深さは23cmを測る。平面形は不整な円形である。底面は凸レンズ状に中心がやや盛り上がり、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はⅣ層中である。

〈埋土〉上部は暗褐色シルトで下部は黄褐色粘土質シルトからなる。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

6号土坑

〈位置〉Ⅱ A 12～16 グリッドにかけて位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層で楕円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が213cm×143cm、底部が180cm×116cmで深さは75cmを測る。平面形は不整な楕円形である。底面は北東側が深く、傾斜している。壁は斜めに立ち上がるが、南東側は途中から緩やかになり、段状となる。底面と壁の下部はⅤ層中になる。

〈埋土〉上部は黒褐色シルト、下部は黄褐色シルトが中心となる。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

7号土坑

〈位置〉Ⅲ B 10 グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅴ層で楕円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が91cm×72cm、底部が72cm×57cmで深さは13cmを測る。平面形は不整な楕円形である。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がるが、北側の壁は垂直に近い。底面、壁ともⅤ層中である。

〈埋土〉上部は暗褐色シルト、下部は黄褐色シルトが主体となる。自然堆積である。

〈遺物〉1は土師器の台付皿である。皿部の2分の1程度の残存状況であるが、ロクロ形成で器面調整の痕跡は認められない。

〈時期〉遺物が破片1片のみのため断定できないが、10世紀後半以降の可能性はある。

8号土坑

〈位置〉Ⅲ B 14～15 グリッドにかけて位置する。

〈検出状況〉Ⅴ層で楕円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が112cm×98cm、底部が82cm×51cmで深さは23cmを測る。平面形は不整な円形である。底面は北側部分がやや深い、ほぼ平坦である。壁は底面からなめらかに斜めに立ち上がる。

底面、壁ともにV層中である。

〈埋土〉黒褐色シルトが主体であるが、明黄褐色粘土質シルトとの混合土が堆積する部分もある。人為堆積である。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

9号土坑

〈位置〉ⅡB6グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層で円形の黒褐色のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が97cm×88cm、底部が69cm×63cmで深さは33cmを測る。平面形は不整な円形である。底面は南東部分がやや深い、ほぼ平坦である。壁は底面からなめらかにやや急な角度で立ち上がる。底面はV層中になる。

〈埋土〉明黄褐色シルト主体の埋土であるが、中に暗褐色シルトの層が入る。自然堆積か人為的堆積なのか不明である。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

10号土坑

〈位置〉ⅡB1グリッドにかけて位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層で円形のプランを確認した。

〈規模・形態〉規模は開口部が94cm×87cm、底部が67cm×65cmで深さは29cmを測る。平面形は不整な円形である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈埋土〉上部は黄褐色粘土質シルトに暗褐色シルトが混じり、下部は暗褐色シルトである。人為的堆積である。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

11号土坑

〈位置〉ⅢB1グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層で円形のプランを確認した。

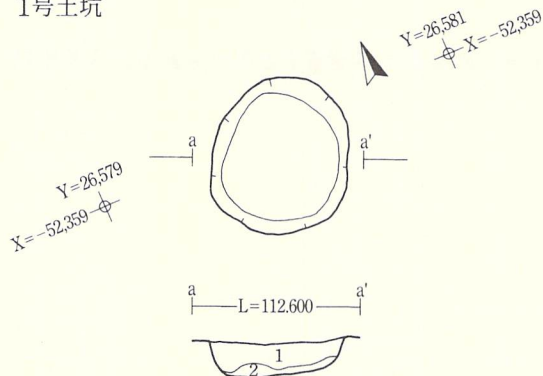
〈規模・形態〉規模は開口部が244cm×182cm、底部が223cm×167cmで深さは7cmを測る。平面形は不整なだるま形である。底面は平坦だが、壁は検出した面から浅いため、全容は不明である。2基の土坑が重複している可能性もあるが、断面の観察では判断できなかったため1基の土坑とした。

〈埋土〉暗褐色シルト主体の埋土である。自然堆積、人為的堆積に別は不明である。

〈遺物〉2は須恵器の坏でロクロ形成である。

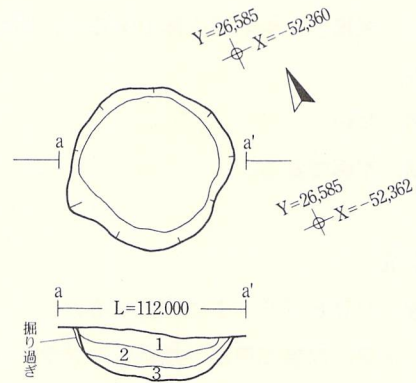
〈時期〉遺物が破片1片のみのため確定できないが、平安時代の可能性がある。

1号土坑



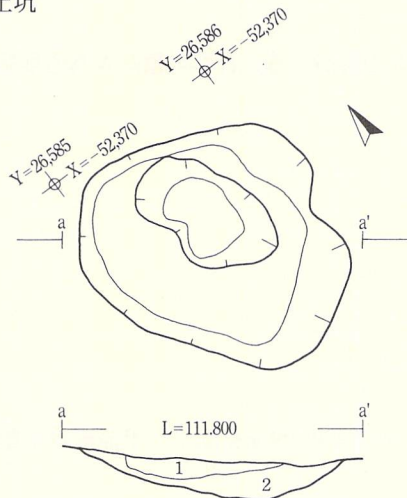
- a - a'
- 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/6) 30%含む 植物根を多く含む
 - 10Y R6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性あり しまりあり
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 2~3%含む

2号土坑



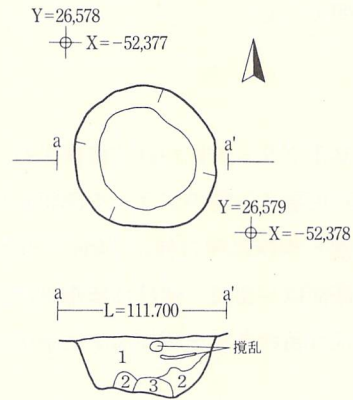
- a - a'
- 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/8) 10%含む
 - 10Y R6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性あり しまりあり
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 2%、
にぶい黄褐色シルト (10Y R4/3) 5%含む
 - 10Y R2/3 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
明黄褐色粘土 (10Y R6/8) 10%含む

3号土坑



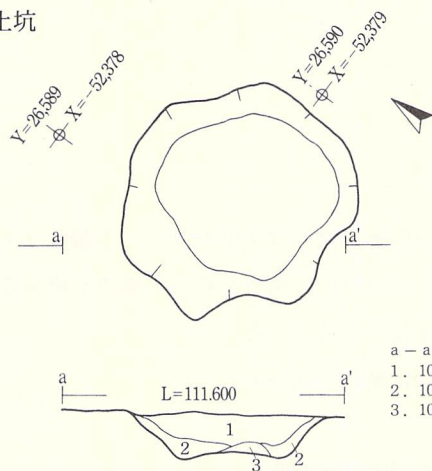
- a - a'
- 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
黄橙色~明黄褐色粘土質シルト (10Y R7/8~6/8) 10%含む
 - 10Y R6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性あり しまりあり
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 10%混合土
黒褐色シルト (10Y R3/2) 5%含む

4号土坑

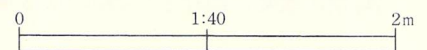


- a - a'
- 10Y R4/4 褐色シルト 粘性なし しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/8) 30%混合土
灰白色粘土質シルト (10Y R7/1) 5%含む
 - 10Y R3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりなし
 - 10Y R3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりあり

5号土坑

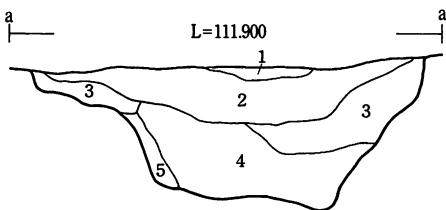
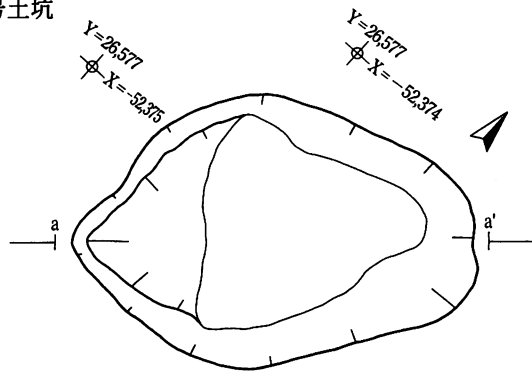


- a - a'
- 10Y R3/4 暗褐色シルト 粘性なし しまりあり
 - 10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
 - 10Y R7/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性ややあり しまりあり



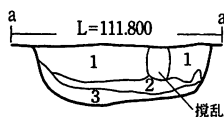
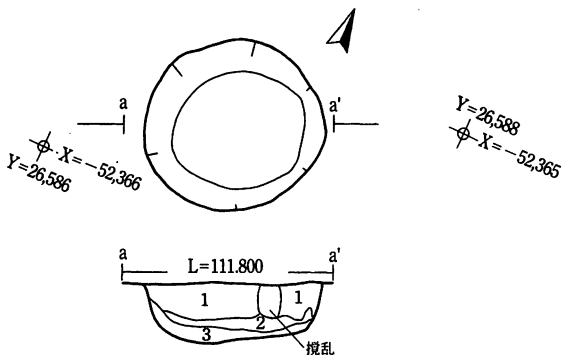
第12図 1~5号土坑

6号土坑

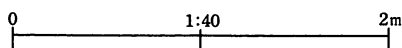


- a - a'
- 10Y R6/6 明黄褐色粘土質シルト 粘性なし しまりあり
にぶい黄褐色シルト (10Y R4/3) 5%含む
 - 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/6) 30%含む
 - 10Y R6/6~6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性なし しまりあり
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 3%含む 礫 (径0.5~3cm) 少量含む
 - 10Y R6/6~6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性なし しまりややあり
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 30%含む 礫 (径0.5~3cm) 多量含む
 - 10Y R6/6~6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性なし しまりややあり

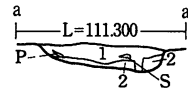
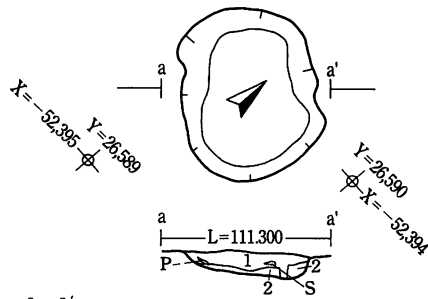
9号土坑



- a - a'
- 10Y R7/6~7/8 明黄褐色~黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり
暗褐色シルト (10Y R3/4) 3%含む
 - 10Y R3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり
 - 10Y R7/1 灰白色シルト、10Y R7/8 黄褐色シルトの混合土
しまりややあり 粘性ややあり
暗褐色シルト (10Y R3/3~3/4) 2%含む

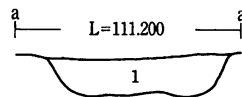
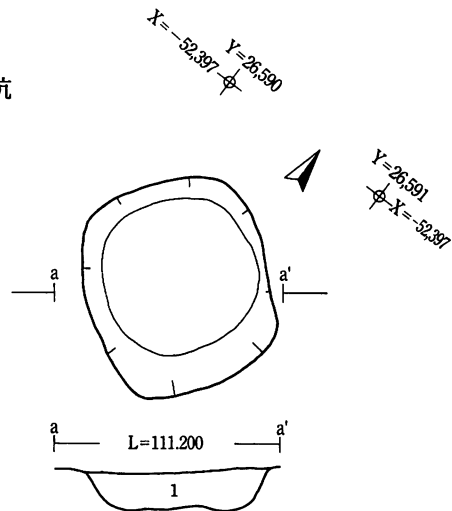


7号土坑



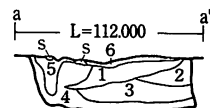
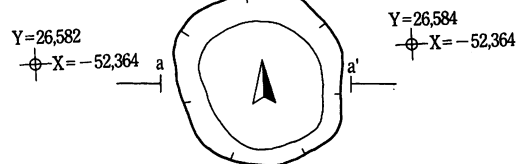
- a - a'
- 10Y R3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまりあり
 - 10Y R7/2 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性ややあり しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/8) 1~2%含む

8号土坑



- a - a'
- 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
明黄褐色粘土質シルト (10Y R6/8) 20%、
にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R7/2) 30%含む

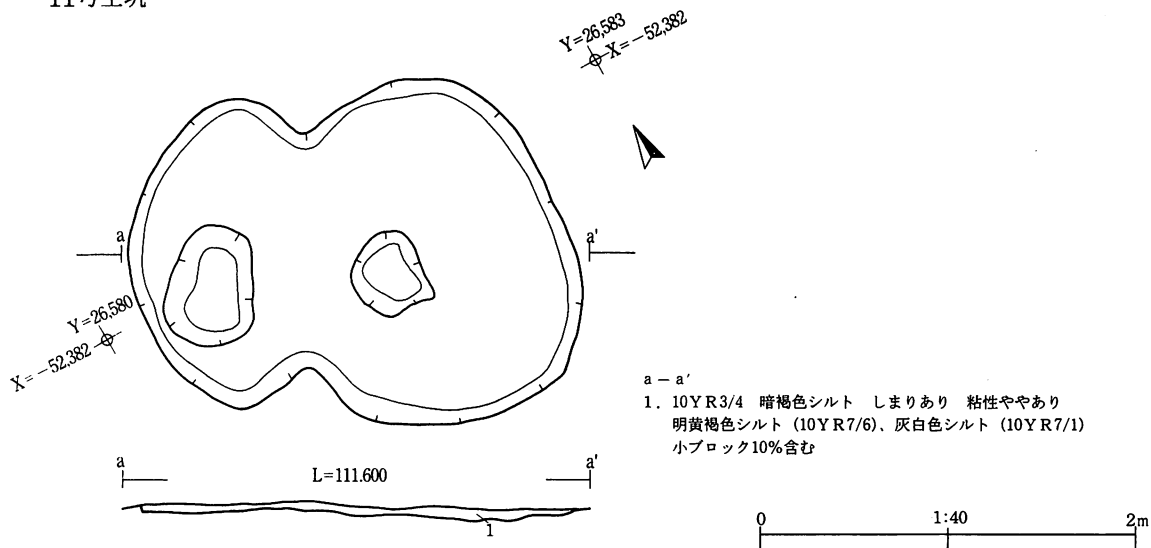
10号土坑



- a - a'
- 10Y R7/8 黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり
明黄褐色シルト (10Y R7/6) 大ブロック30%、
暗褐色シルト (10Y R3/4) 3%含む
 - 10Y R7/8 黄褐色粘土質シルト しまりあり 粘性あり
暗褐色シルト (10Y R3/4) 3%含む
 - 10Y R3/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性ややあり
明黄褐色シルト10%含む
 - 10Y R3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性あり
明黄褐色シルト極小ブロック5%含む
 - 10Y R7/8 黄褐色粘土質シルトブロック しまりややあり 粘性ややあり
 - 10Y R3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 表土の残りか?

第13図 6~10号土坑

11号土坑



第14図 11号土坑

5. 焼土遺構

合計で8基検出された。すべての遺構がIV層黄褐色土層からの検出である。

1号焼土遺構

〈位置〉ⅢB1グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は不整な円形である。規模は33cm×30cmを測り、焼成の良好な焼土が8cmの厚さで堆積している。現地性の焼土である。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

2号焼土遺構

〈位置〉ⅢB2グリッドに位置する。すぐ隣には3号焼土遺構が位置する。

〈規模・形態〉平面形は不整な楕円形である。規模は34cm×28cm、焼土の厚さは3cmを測る。上部が削平されているため、全容は不明だが現地性の焼土である可能性が高い。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

3号焼土遺構

〈位置〉ⅢB2グリッドに位置する。すぐ隣には2号焼土遺構が位置する。

〈規模・形態〉平面形は不整な楕円形である。規模は34cm×32cm、焼土の厚さは3cmを測る。上部が削平されているため、全容は不明だが現地性の焼土である可能性が高い。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

4号焼土遺構

〈位置〉ⅢB 10 グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は不整な楕円形である。48cm×29cmの範囲に焼土が散在する。暗褐色シルトに焼土がブロック状に混じり、炭化物とともに1.5cmの厚さで堆積する。異地性の焼土の可能性が高い。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

5号焼土遺構

〈位置〉ⅢB 14 グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は不整な楕円形である。66cm×56cmの範囲に焼土が散在する。暗褐色シルトに焼土がブロック状に混じり、炭化物とともに2cmの厚さで堆積する。異地性の焼土の可能性が高い。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

6号焼土遺構

〈位置〉ⅢB 15 グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は不整な楕円形である。規模は51cm×40cmの範囲に焼土が散在する。暗褐色シルトに焼土がブロック状に混じり、炭化物とともに2cmの厚さで堆積する。地山面にも焼成を受けた痕跡があり、現地性の焼土の可能性はある。

〈遺物〉ない。

〈時期〉不明である。

7号焼土遺構

〈位置〉ⅢB 15 グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は不整な楕円形である。規模は31cm×30cm、焼土の厚さは2cmを測る。上部が削平されているが、焼成は良く現地性の焼土である。

〈遺物〉3の土師器の坏は、ロクロ形成で器面調整の痕跡は認められない。4は須恵器の坏でロクロ形成である。

〈時期〉平安時代の可能性がある。

8号焼土遺構

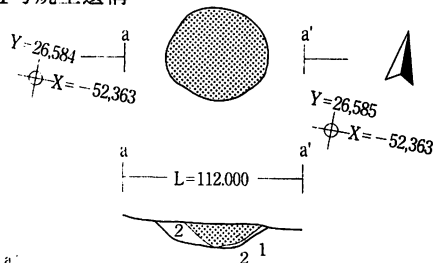
〈位置〉ⅣB 8 グリッドに位置する。

〈規模・形態・埋土〉平面形は楕円形である。規模は44cm×37cmを測る、褐色シルトに焼土と炭化物が混じり11cmの厚さで堆積する。異地性の焼土である可能性が高く、小土坑に伴って堆積したとも推測される。

〈遺物〉5は土師器の甕で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの調整が施されている。

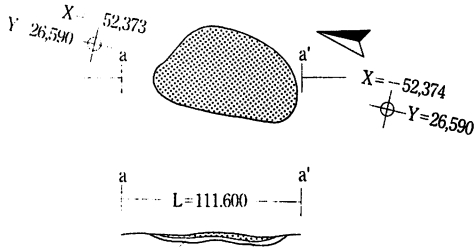
〈時期〉平安時代の可能性がある。

1号焼土遺構



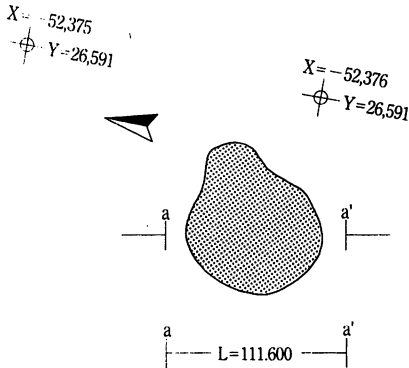
- a-a'
- 5 Y R 6/8 橙色焼土 しまりややあり 粘性ややあり
 - 10 Y R 7/6 明黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 暗褐色シルト (10 Y R 3/4) 5% 含む

4号焼土遺構



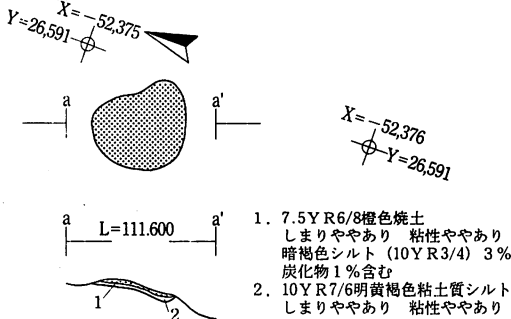
- a-a'
- 10 Y R 3/6 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 橙色焼土 (7.5 Y R 6/8) 小ブロック10% 炭化物5% 含む
 - 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり

6号焼土遺構



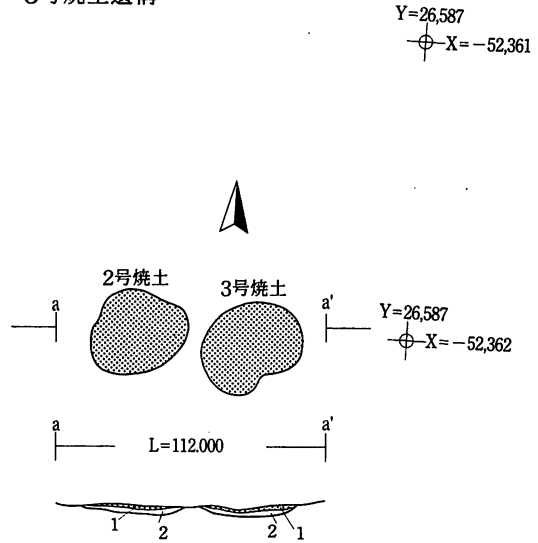
- 10 Y R 3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 明褐色焼土 (7.5 Y R 5/8) 少ブロック10% 炭化物5% 含む
- 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり

7号焼土遺構



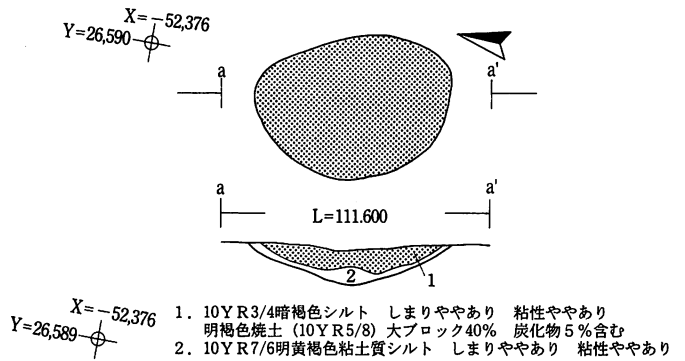
- 7.5 Y R 6/8 橙色焼土 しまりややあり 粘性ややあり 暗褐色シルト (10 Y R 3/4) 3% 炭化物1% 含む
- 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり

2・3号焼土遺構



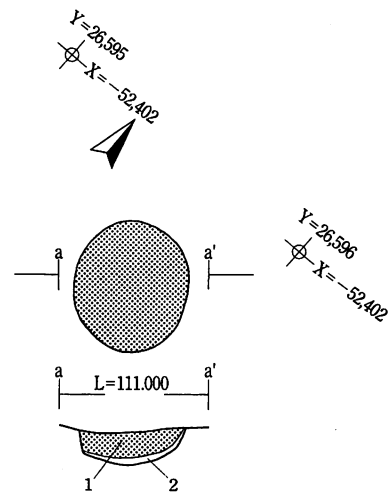
- a-a'
- 7.5 Y R 6/8 橙色焼土 しまりややあり 粘性ややあり
 - 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり

5号焼土遺構

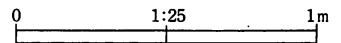


- 10 Y R 3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 明褐色焼土 (10 Y R 5/8) 大ブロック40% 炭化物5% 含む
- 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり

8号焼土遺構



- 10 Y R 4/4 褐色シルト しまりあり 粘性あり 赤褐色焼土 (2.5 Y R 4/8) 極小~中ブロック20% 明黄褐色シルト (10 Y R 7/6) 少ブロック5% 炭化物5% 含む
- 10 Y R 7/6 明黄褐色粘土質シルト しまりややあり 粘性ややあり



第15図 焼土遺構

6. 溝 跡

合計2条検出した。

1号溝跡

〈位置〉ⅡB6～ⅢB1グリッドにかけて位置する。

〈重複関係〉pp18と重複するが本遺構が古い。

〈検出状況〉Ⅳ層でプランを確認した。

〈規模・形態・方向〉規模は上幅が81cm～58cm、下幅が53cm～35cm、深さが26cmで全長は17mを測る。方向は北北東-南南西に、直線的に延びる。

〈埋土〉黒褐色シルトを主体とした埋土である。自然堆積である。

〈遺物〉ない。

〈時期〉遺物がないので詳細は不明である。

2号溝跡

〈位置〉ⅢB15～ⅣB3グリッドにかけて位置する。

〈検出状況〉Ⅴ層でプランを確認した。

〈規模・形態・方向〉規模は上幅が54cm～38cm、下幅が30cm～28cm、深さが8cmで全長は3.5mを測る。方向は1号溝跡とほぼ同じ北北東-南南西であるが、北-南に多少近い方向で直線的に延びる。先端部の約3.5mの検出であるが、それ以外の部分は削平されてしまったものと考えられる。

〈埋土〉黒褐色シルトに黄褐色粘土質シルトが混じる。

〈遺物〉縄文土器が数片出土した。12は深鉢の胴部で、地文のみが施文される。

〈時期〉縄文土器が出土したが、量も少なく紛れ込んだ可能性が高い。

7. 柱穴状小土坑

柱穴列とした以外に33基の柱穴状小土坑を検出している。はっきりとした規則性は感じられないが、pp13、14、15、16、18の5基の柱穴状小土坑は1号～4号柱穴列の柱穴に規模、埋土ともに似ており、何らかの関係があるのかもしれない。また1号焼土遺構付近のpp1、2、3、4、17、43、44、46の8基の柱穴状小土坑については、1号焼土遺構や2、3号焼土遺構を地床炉とする住居などを構成していた可能性がある。埋土の状況と出土した遺物について以下に記すこととする。

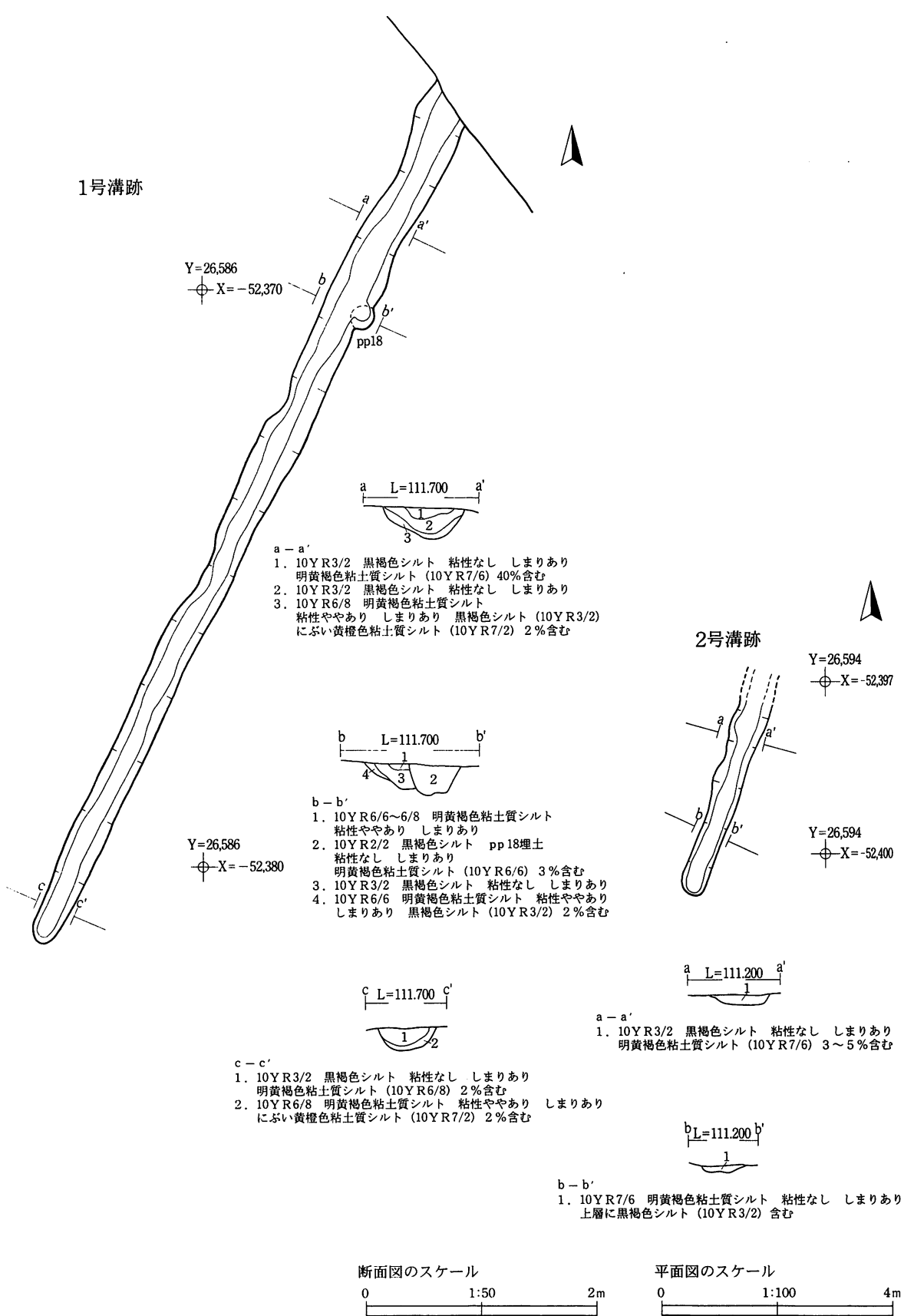
pp1

〈埋土〉暗褐色(10YR3/4)シルトを主体とした埋土で、明黄褐色(10YR7/6)シルトが小ブロックで3%混じる。また炭化物が全体的に僅かに混じり、埋土の下部に焼土粒が微量に含まれる。

〈遺物〉6は土師器の坏の底部から体部で、摩耗が激しいが、回転糸切りの痕跡が窺える。7は須恵器の甕の口縁部で、外反し、上端が引き出される。8は土師器の坏で、ロクロ形成である。9は焼成された粘土塊である。

pp2

〈埋土〉暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトを主体とした埋土で、明黄褐色(10YR7/6)粘土質シルトが小ブロックで2%混じる。底に近い埋土は、明黄褐色粘土質シルトになる。



第16図 溝跡

pp 3

〈埋土〉 pp 2 と似るが、明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルトが小～中ブロックで10%混じる。

pp 4

〈埋土〉 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトを主体とした埋土で、明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルトが中ブロックで10%混じる。炭化物と焼土が僅かに含まれる。pp 17 に似る。

pp 17

〈埋土〉 pp 4 と似る。

〈遺物〉 10 は土師器の坏か皿の口縁部だが、器形は扁平な印象を受ける。ロクロ形成である。

pp 43

〈埋土〉 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトを主体とした埋土で、明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルトが混じるが、他の柱穴よりも混じりが少ない。焼土が僅かに含まれる。

pp 44

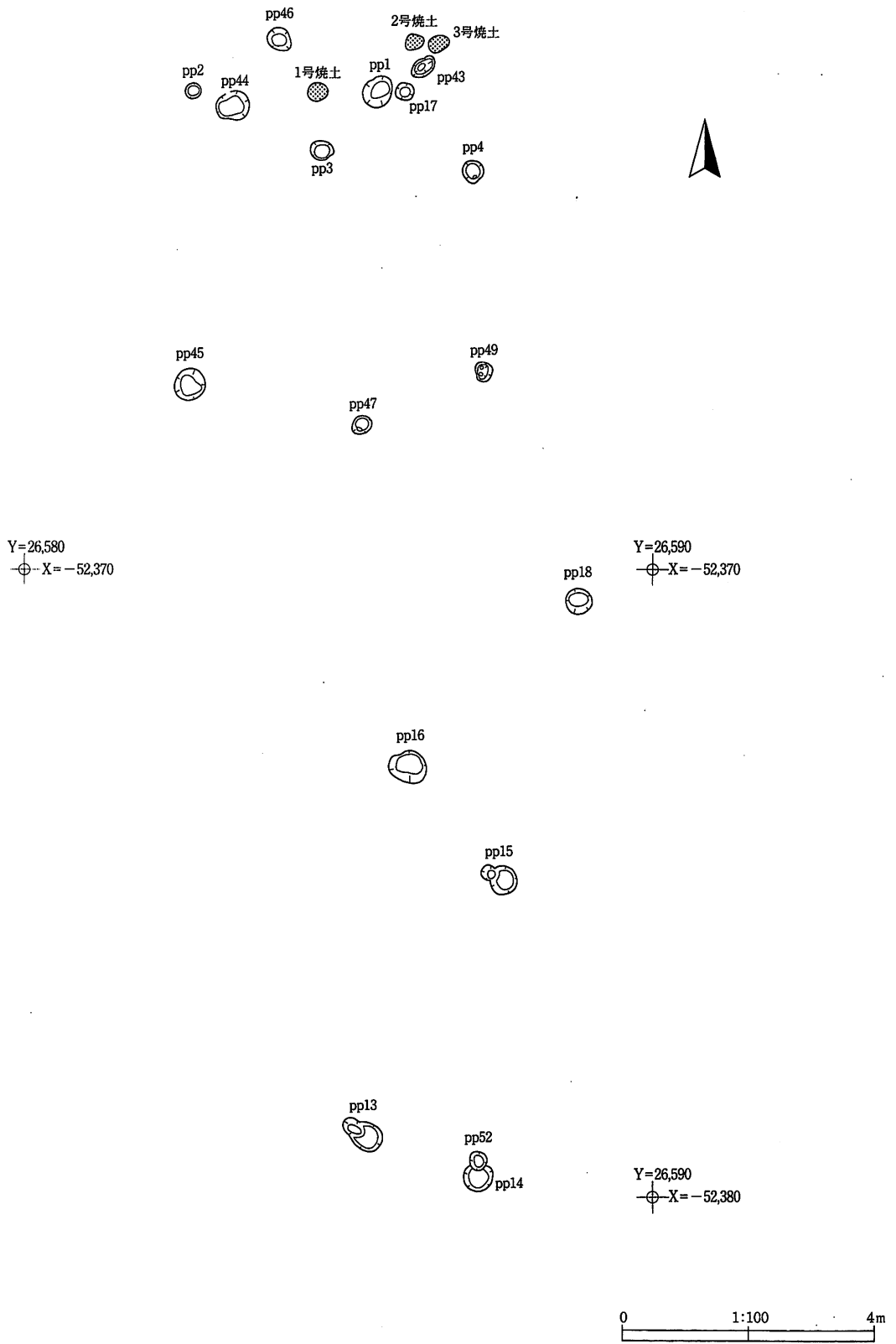
〈埋土〉 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトを主体とした埋土で、明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルトが小ブロックで10%混じる。

pp 46

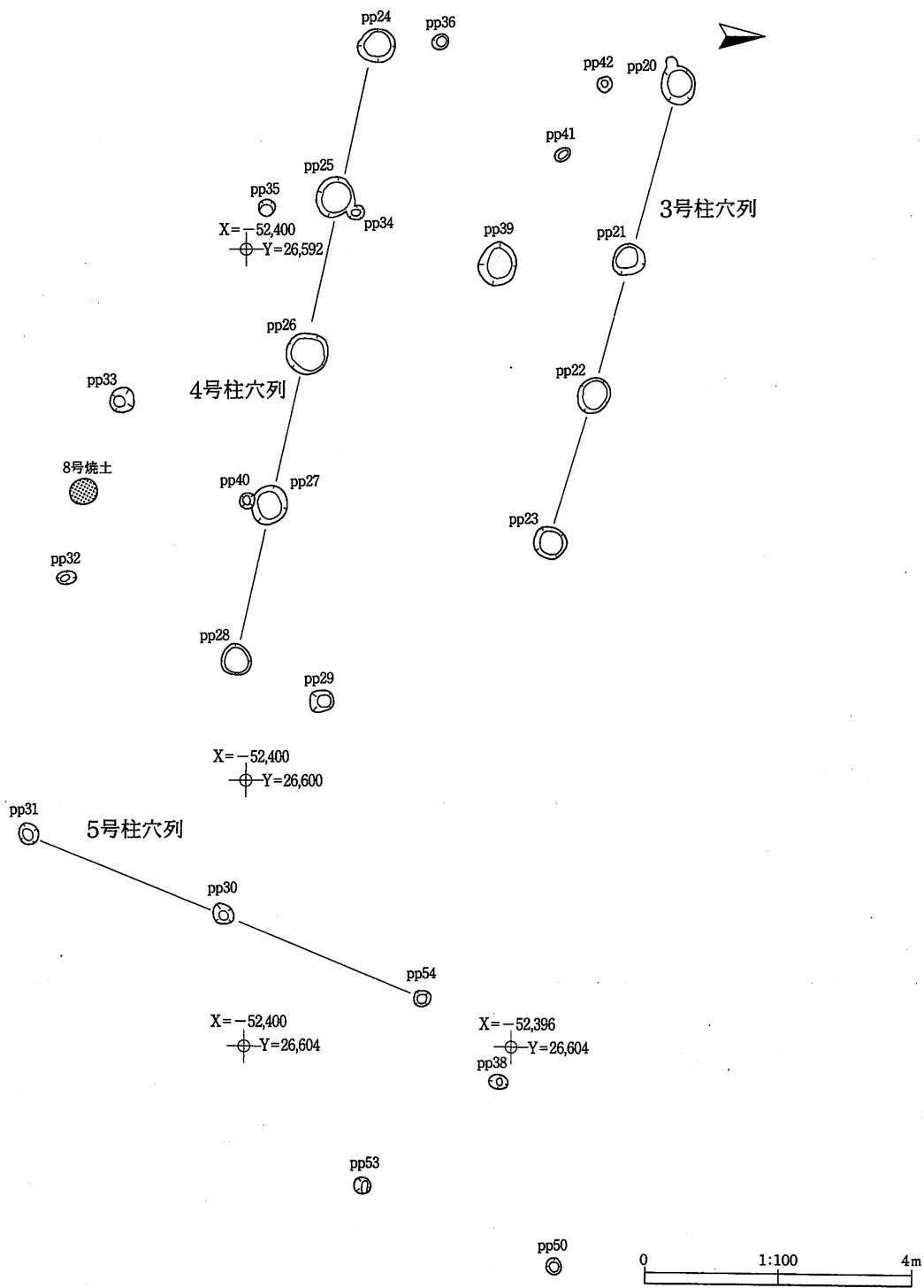
〈埋土〉 pp 44 に似る。

第4表 柱穴状小土坑観察表

No.	直径(cm)	深さ(cm)	備 考	No.	直径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	53 × 44	13.8	6の坏、7の甕、8の坏が出土	36	25 × 23	27	
2	27 × 25	18.4		38	30 × 24	20.1	
3	35 × 33	13.9		39	68 × 58	12.7	
4	36 × 35	6.6		40	24 × (24)	15	
12	30 × 30	16.1		41	25 × 19	15.4	
13	68 × 43	17.9		42	26 × 24	14.0	
14	55 × (55)	9.1		43	44 × 27	31.0	
15	44 × (44)	19.3		44	54 × 43	7.0	
16	52 × 49	26.5		45	49 × 49	8.0	
17	29 × 28	20.4	10の坏が出土	46	44 × 38	7.1	
18	42 × 40	26.5		47	30 × 29	16.1	
29	37 × 33	19.4		49	32 × 27	11.4	
32	29 × 19	24.5		50	26 × 24	17.4	
33	37 × 35	26.0		51	29 × 22	25.4	
34	(27) × 22	—		52	47 × (44)	9.1	
35	27 × 25	26.7		53	26 × 23	19.2	



第17图 柱穴状小土坑 (1)



第18图 柱穴状小土坑 (2)

V 遺構外出土遺物

1. 土器

(1) 縄文土器

12、13、14 は深鉢の体部で、地文のみしかわからないが、胎土や焼成の状況から中期の深鉢の可能性はある。

(2) 土師器・須恵器

14～18 は土師器・須恵器の坏類の口縁部と体部で、すべてがロクロ形成である。小破片がほとんどで摩耗しているものもあることから明瞭には判断できないが、器面調整の痕跡は認められない。15 は須恵器の坏の体部である。16 は黒色に焼成されている。18 は器高が低いので皿になる可能性がある。19、20 は土師器の甕の口縁部である。19 は外面がヨコナデ、ヘラケズリ、内面がヨコナデ、ハケメの調整が施され、20 は外面がヨコナデ、内面がヨコナデ、ハケメが調整される。

2. 石器

縄文時代の石器を2点掲載した。22 は石錐で、剥片の一部を調整して刃部を作り出している。23 は不定形石器としたが、1 縁辺の加工である。未完成品の可能性がある。

3. 銭貨

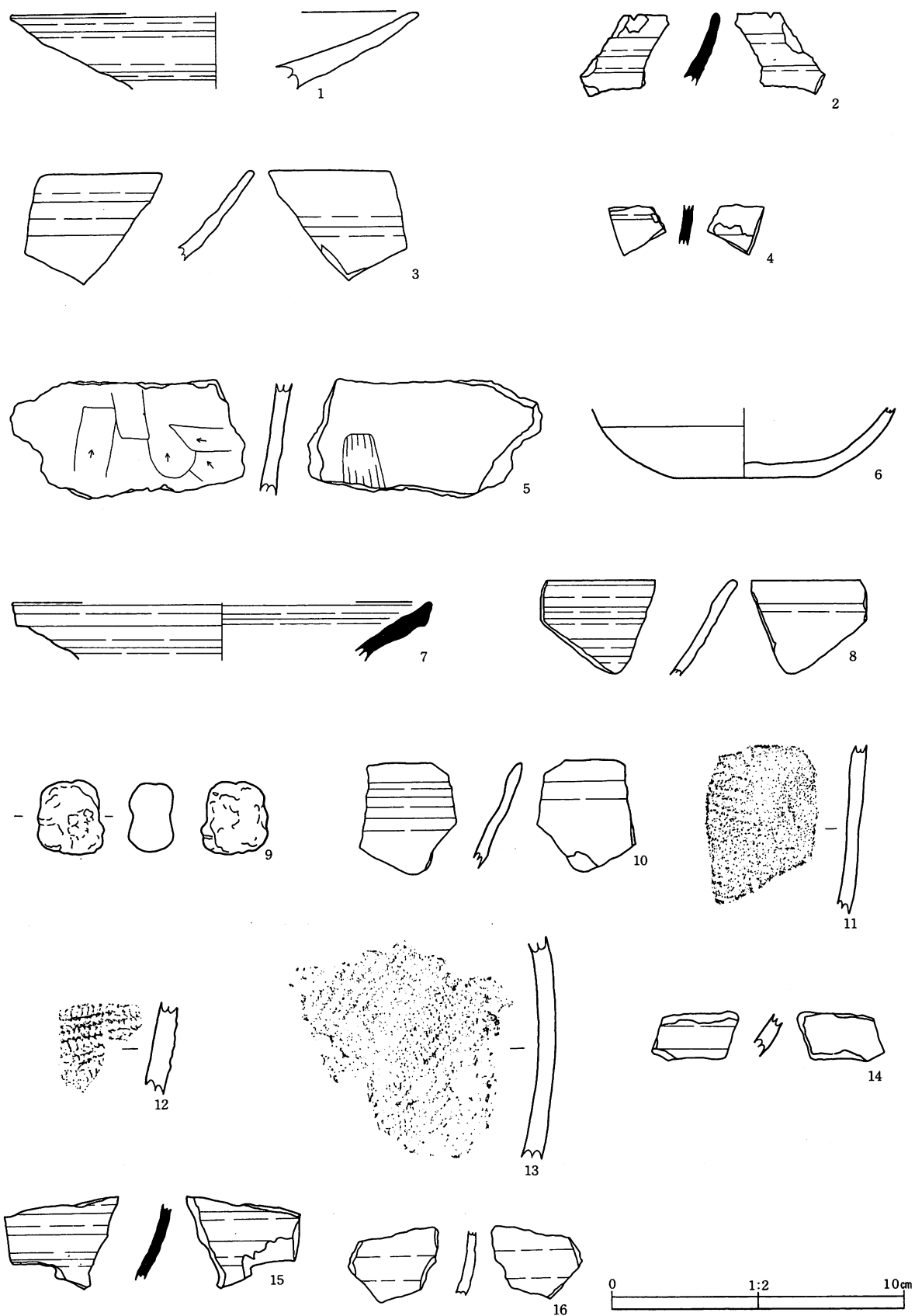
寛永通宝が1枚出土した。新寛永である。

第5表 土器観察表 縄文土器

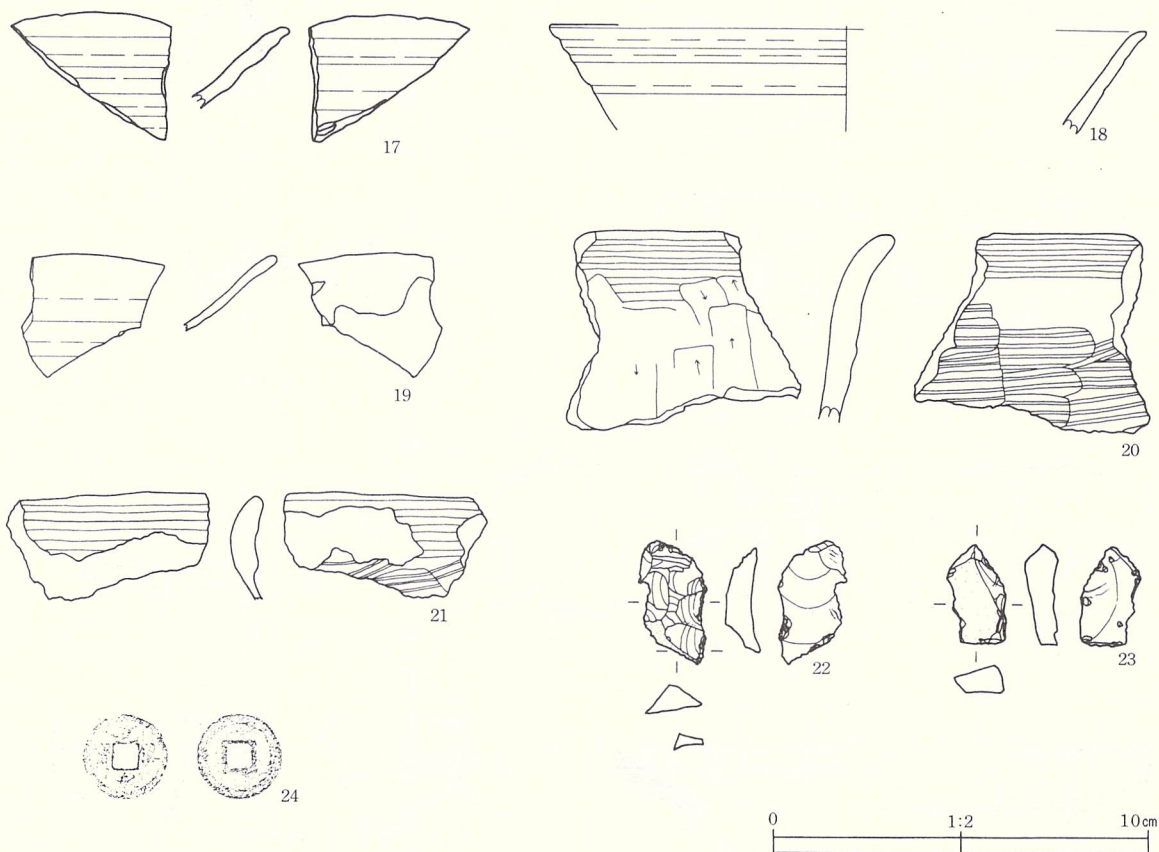
番号	出土地点・層位	器種・部位	文様の特徴など	内面	備考
11	2号溝跡・埋土	深鉢・体部	RL縄文?	ナデ	摩耗
12	IV C 16・取水堰跡	深鉢・体部	LR縄文	ナデ	
13	II B 2・黒褐色土	深鉢・体部	LR縄文	ナデ	

第6表 土器観察表 土師器・須恵器

番号	種類	器種	出土位置・層位	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	備考
				高さ	口径	底径				
1	土師器	台付皿	7号土坑・埋土	(2.5)	(14.0)		ロクロ		黄橙	
2	須恵器	坏	11号土坑・埋土	(2.5)			ロクロ		灰	
3	土師器	坏	7号焼土・埋土	(3.9)			ロクロ		橙	
4	須恵器	坏	7号焼土・埋土	(1.7)			ロクロ		黄灰	
5	土師器	甕	8号焼土・埋土	(3.8)			ヘラケズリ	ヘラナデ	黄橙	
6	土師器	坏	PP1・埋土	(2.4)		5.0			にぶい橙	摩滅・回転糸切りの痕跡
7	須恵器	甕	PP1・埋土	(2.0)	(14.4)		ロクロ	ロクロ	赤黒・灰赤	
8	土師器	坏	PP1・埋土	(4.1)			ロクロ	ロクロ	にぶい橙	
10	土師器	坏	PP17・埋土	(4.0)			ロクロ	ロクロ	にぶい橙	皿の可能性あり
14	土師器	坏?	II B 1・II層	(1.5)			ロクロ	ロクロ	浅黄橙	
15	須恵器	坏	II B 10・II層	(3.1)			ロクロ	ロクロ	灰黄	
16	土師器	坏	II B 10・II層	(2.2)			ロクロ	ロクロ	にぶい橙	
17	土師器	坏	II B 10・II層	(3.3)			ロクロ	ロクロ	灰白	皿の可能性あり
18	土師器	坏	II B 14・II層	(2.7)	(16.0)		ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙	
19	土師器	坏	II B 14・II層	(3.3)			ロクロ		橙	皿の可能性あり
20	土師器	甕	II B 14・II層	(3.5)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	にぶい黄橙	
21	土師器	甕	II B 14・II層	(2.8)			ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	



第19圖 出土遺物(1)



第20図 出土遺物(2)

第7表 石器観察表

番号	器種	出土地点・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質・産地	備考
22	石錘	ⅡB 2・黒褐色土	2.7	1.7	0.7	3.77	頁岩・北上山地	
23	不定形石器	ⅣC 16・取水堰跡	2.4	1.4	0.6	3.80	頁岩・北上山地	

第8表 土製品観察表

番号	出土地点・層位	種類	重量(g)	備考
9	PP 1・埋土	焼成粘土	9.05	色調は浅黄橙

第9表 銭貨観察表

番号	出土地点・層位	名称	直径(cm)	量目(g)	備考
24	ⅡB 6・Ⅲ層	寛永通寶	2.25	1.66	新寛永

金館跡



第21図 調査終了後地形図・遺構図

VI まとめ

1. 金館跡の構造について

金館跡は北上盆地を東流し、北上川に合流する滝名川北岸の自然堤防となる微高地に立地する。北側と西側は滝名川によって抉り取られたために舌状に張り出した地形となるが、これを利用して館が造られている。防御の点から検討すれば、北側と西側は高低差があり、西側は直接滝名川に接する。南側は今回の調査で、幅が約12m前後の堀が検出されている。東側は調査区外のため発掘調査を行っていないが、最近まで使用されていた取水堰跡らしい長さ約40m、深さが30cm～40cmの窪みが認められ、この堰はかつての堀跡を利用して造られたものと推測される。旧地権者の山上氏も堀跡を利用して堰にしたという伝承を聞いているとのことである。したがって曲輪の北と西側を滝名川と自然地形によって、南と東側は堀によって防御された城館、または居館と推定される。今回の調査からは単郭式と考えられるが、遺跡のさらに南東側に堀跡らしい窪み、現水路も確認でき、他に曲輪が存在し、館跡の範囲が広がる可能性も残る。曲輪に土塁などの痕跡は確認していないが、曲輪にあたる平坦部分をかなり削平したということを経験者から聞いており、何らかの施設が存在していた可能性がある。出入口については、調査区外の部分にあったと推測もできるが、不明である。

曲輪内の遺構については、遺物が少なく時期を特定もしくは推察できる遺構が2、3の土坑の除きほとんどない。よって館が機能していた時期と遺構の関係があるかは不明である。柱穴列についても、柱穴間の寸法は7尺以上で中世的な性格であるが、時期は不明であり、該期の遺構になるのか特定はできない。

2. 遺物

縄文土器、土師器、須恵器などの破片と縄文時代の石器が、小コンテナ1箱ほど出土した。小破片がほとんどで、全体を知るものはないが、10世紀後半以降と考えられる台付皿が出土している。その他にも皿と推定される、扁平な器形となる土師器片が数点ある。坏類はロクロ形成で、器面調整などはされていない。土師器の甕は外面がヨコナデ、内面がハケメ調整される。小破片のため時期を特定できる資料に乏しい。かわらけ、陶磁器などの中世の遺物は出土していない。

3. まとめ

出土した遺物が僅少で小破片のため、遺構の時期を特定できるものが少なく、館の年代は中世を中心とした時期と推定する外はないと考えられる。しかし僅かながら遺構から出土した遺物の中には、10世紀もしくは10世紀後半以降の土師器・須恵器片があり、この時期の生活の痕跡を窺うことができる。この10世紀から10世紀後半以降と考えられる遺物、遺構が、館の年代と結びつく可能性もあるが、調査の結果からは十分な資料が得られなかったため、推測の域を出るものではない。今後、平地に存在する館跡と、立地条件、堀の形態などを比較し、分析することが必要と思われる。

参考・引用文献

- 岩手県教育委員会編 1986 「岩手県の城館跡」『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県文化財調査報告書第 82 集)
- 剏岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992 『上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』(第 161 集)
- 1996 『白井坂遺跡発掘調査報告書』(第 248 集)
- 1996 『松本館跡発掘調査報告書』(第 256 集)
- 1998 『上尾田の館跡発掘調査報告書』(第 300 集)
- 2001 『篠館跡発掘調査報告書』(第 305 集)
- 千田 嘉博・小島 道裕・前川 要 1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社
- 高橋 信雄・小田野 哲憲・熊谷 常正 1987 『岩手の土器』 岩手県立博物館
- 高橋 與右衛門 1989 「掘立柱建物跡の間尺と時代性」『岩手県埋蔵文化財センター紀要ⅠⅩ』
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会
- 西野 修 1998 「東北地方の古代集落—第 3 分冊—北上盆地南部」『第 24 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 水沢市埋蔵文化財調査センター 1995 『仙人西遺跡』 水沢市埋蔵文化財調査センター報告書第 8 集
- 八木 光則 1989 「安倍・清原氏の城柵遺跡」『岩手考古学 第 1 号』

写真図版

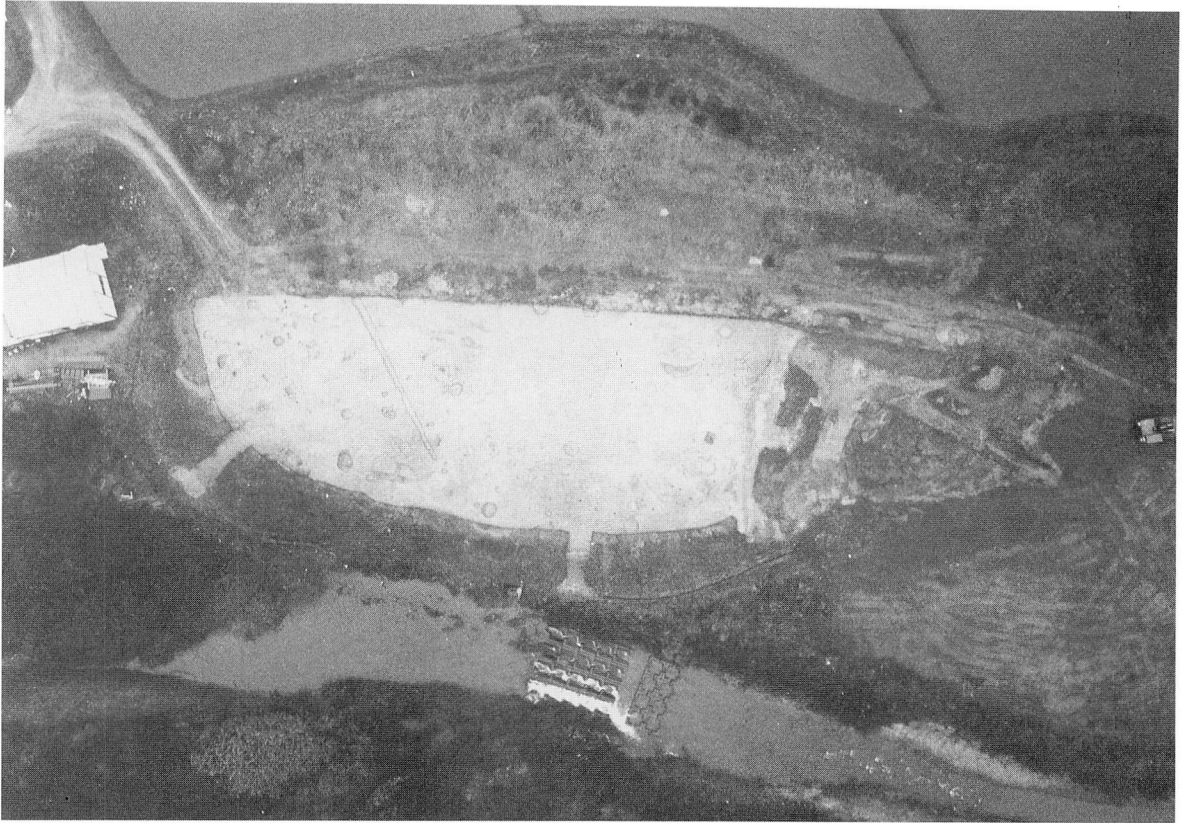


遺跡全景（西から）

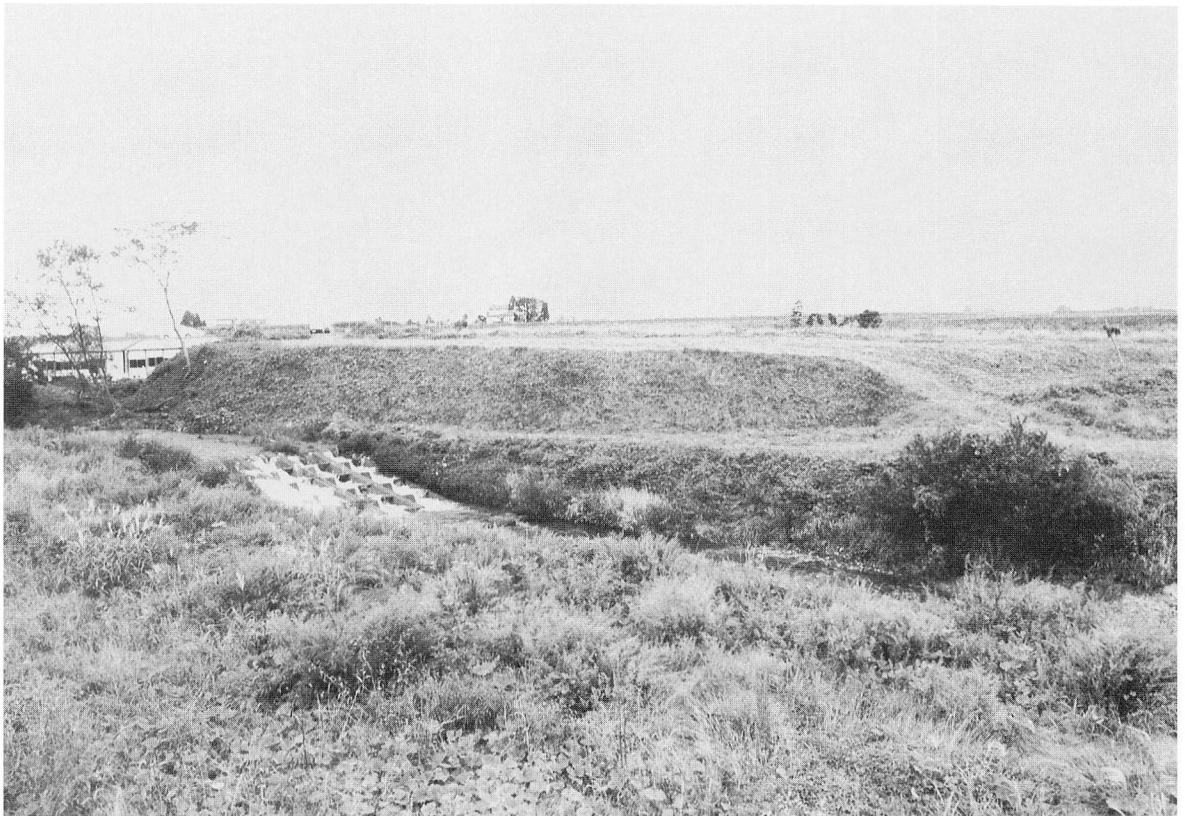


遺跡全景（南から）

写真図版 1 遺跡全景

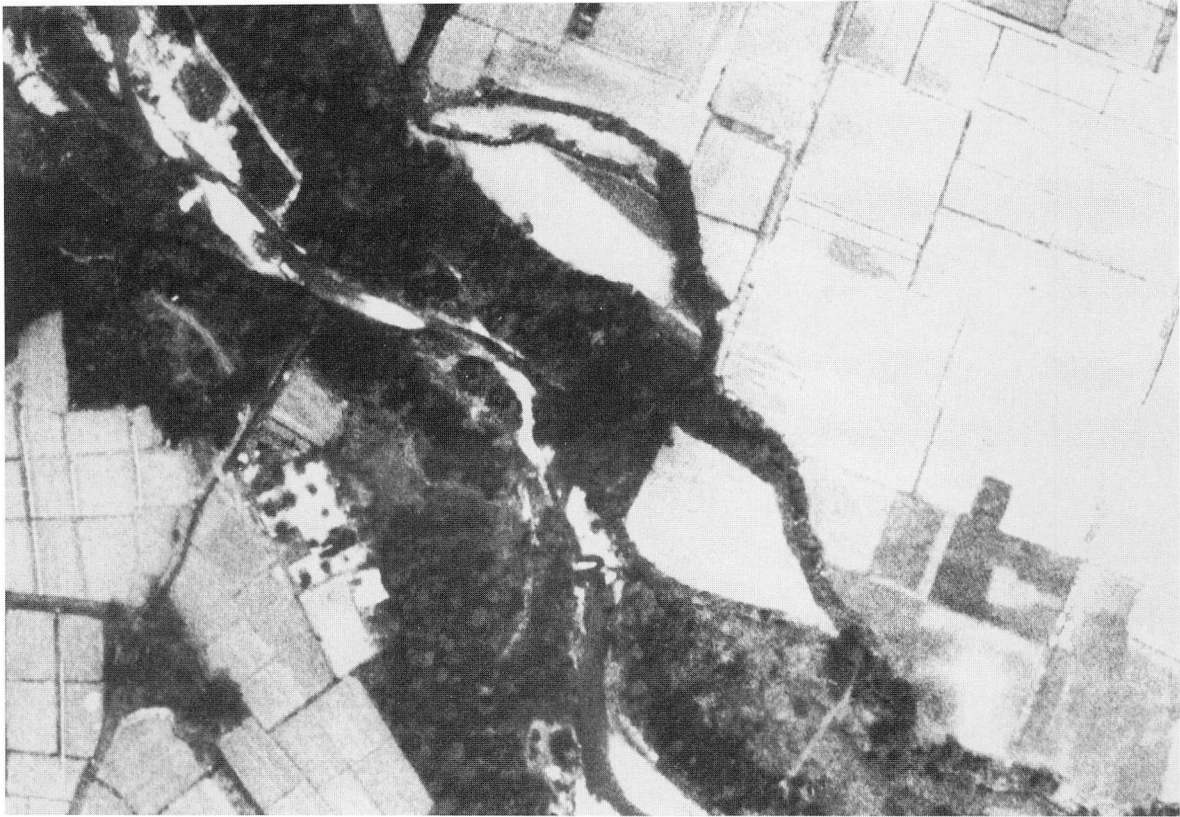


調査区全景

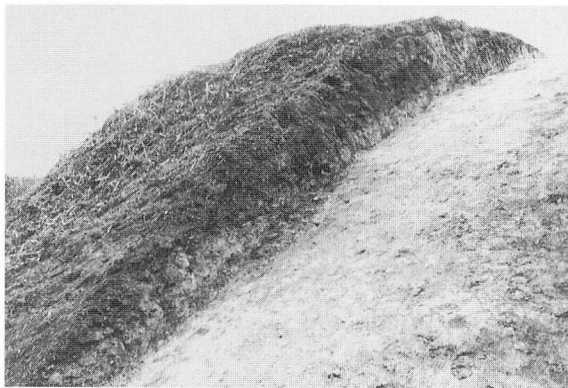


調査前の遺跡近景

写真図版 2 調査区全景・調査前の遺跡近景



昭和37年の遺跡とその周辺



曲輪斜面トレンチ1（北から）



曲輪斜面トレンチ1（南から）

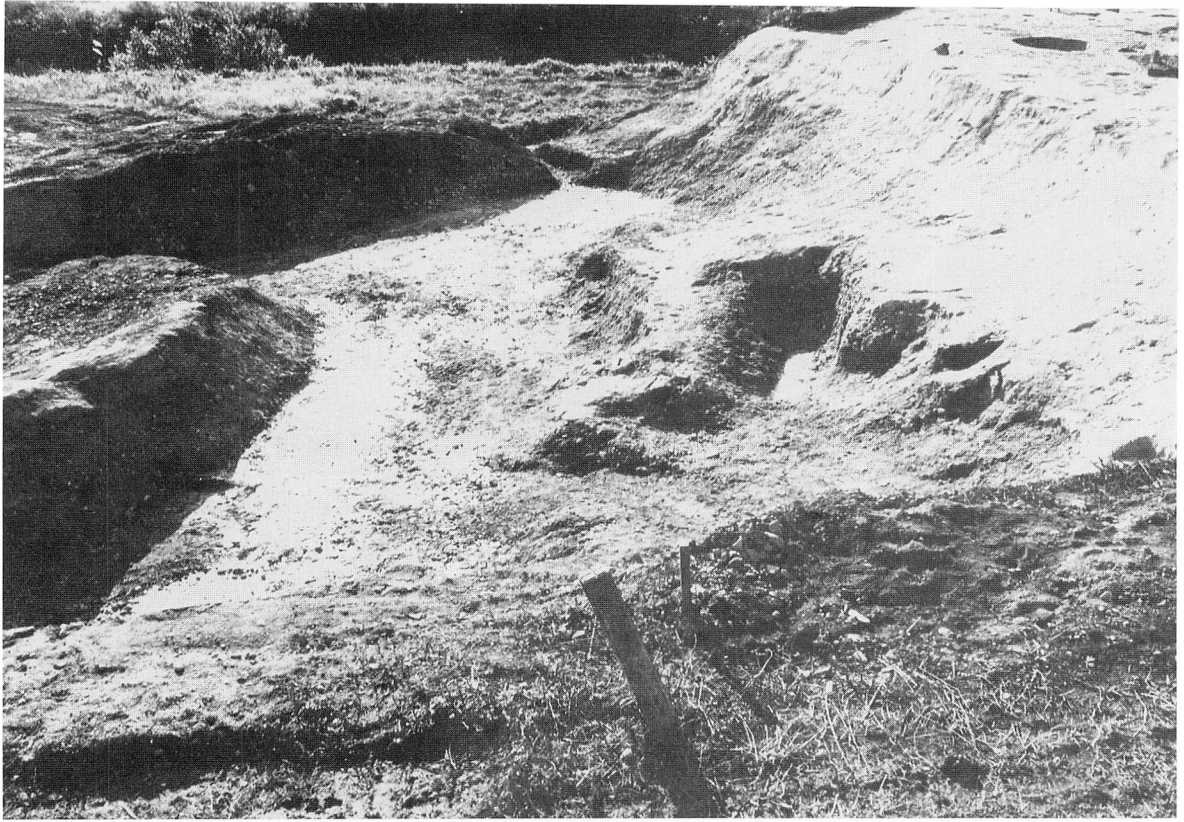


曲輪斜面トレンチ2（西から）



曲輪斜面トレンチ2（東から）

写真図版3 曲輪斜面部

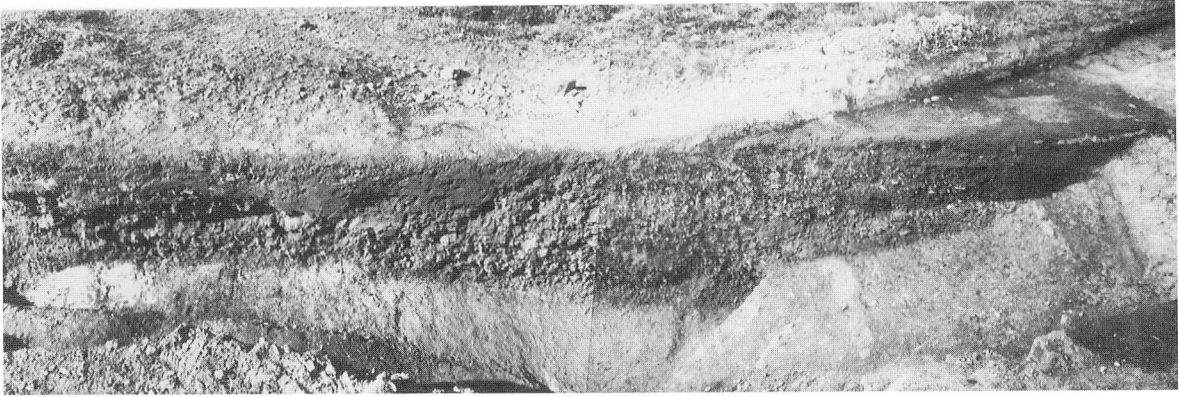


1号堀跡（東から）

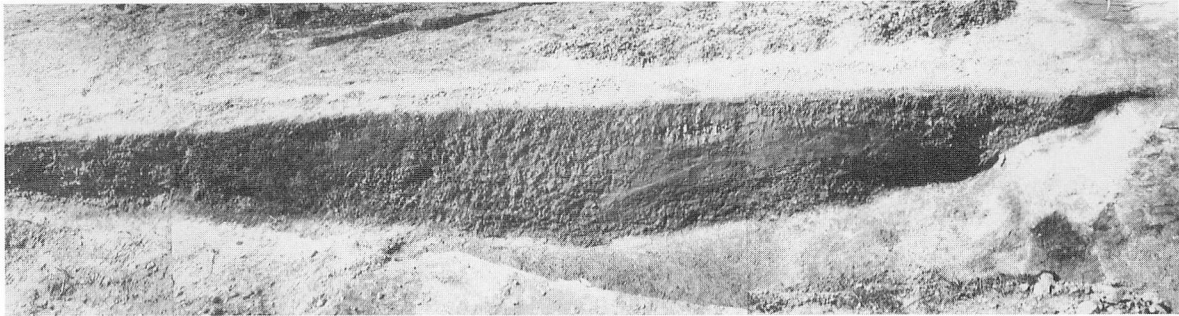


1号堀跡（修復後・北西から）

写真図版4 1号堀跡



1号堀跡断面（断面1）

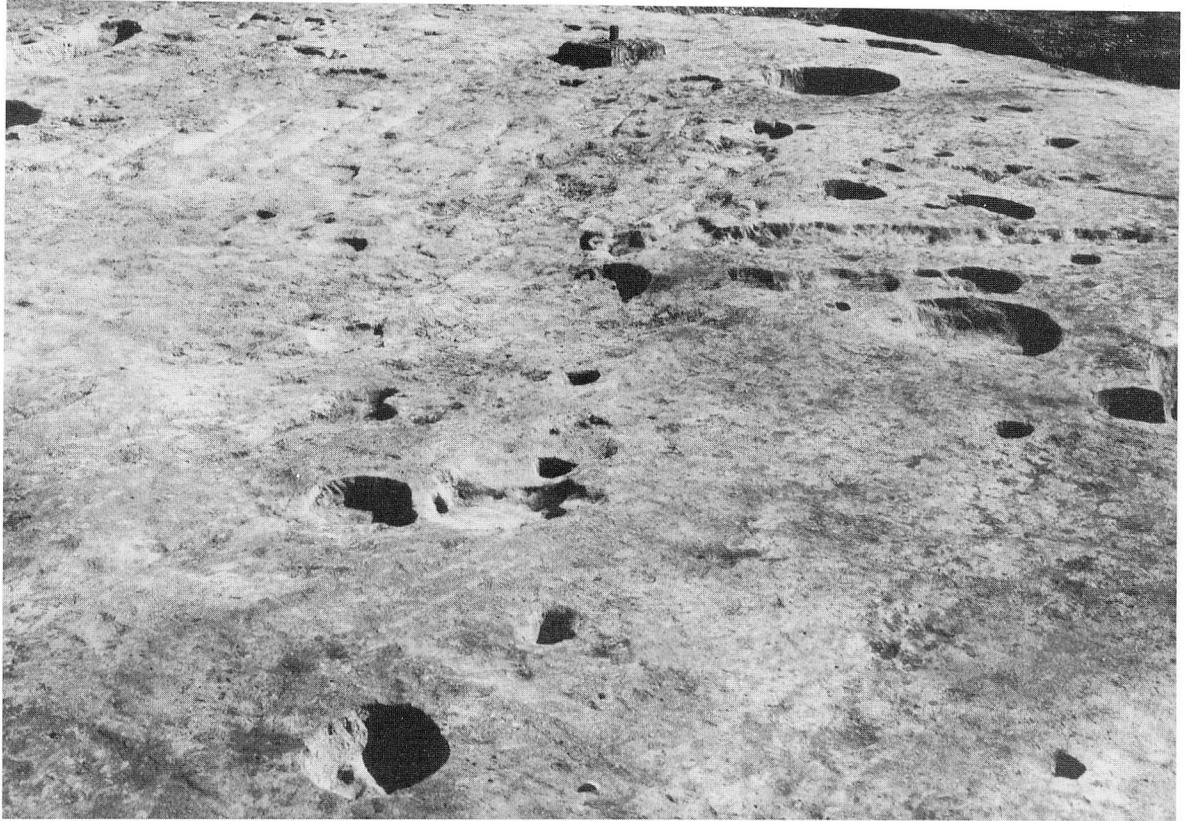


1号堀跡断面（断面2）



1・2号柱穴列（平面）

写真図版5 1号堀跡、1・2号柱穴列



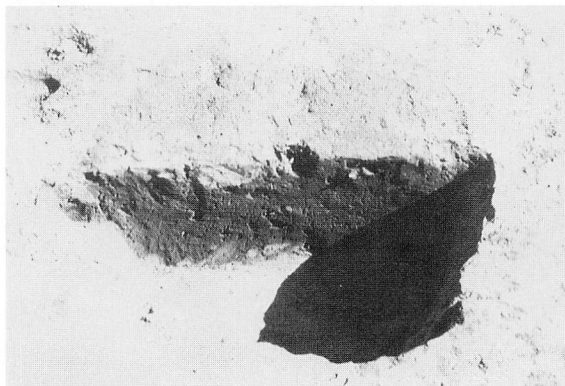
3・4号柱穴列（平面）



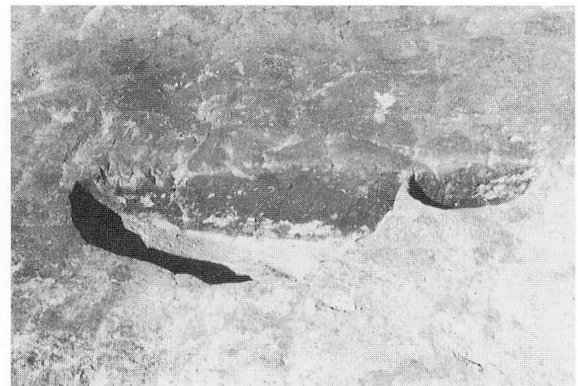
pp 6（断面）



pp 10（断面）

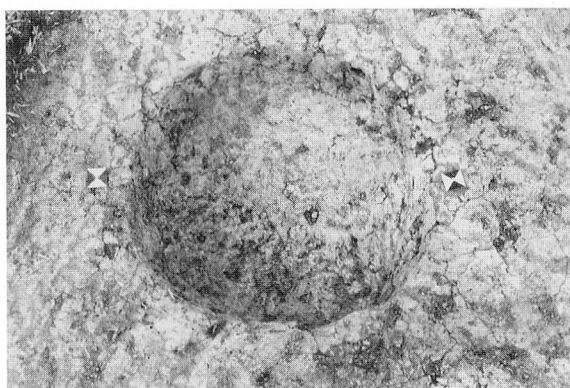


pp 19（断面）

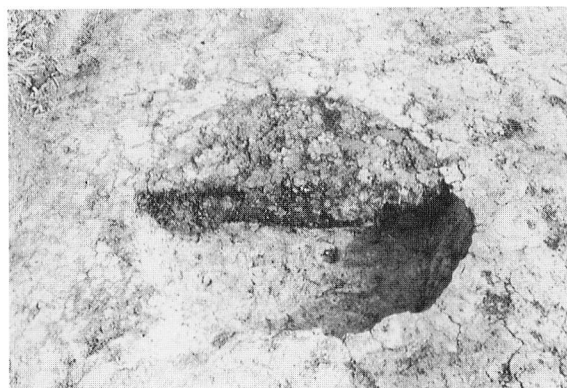


pp 25（断面）

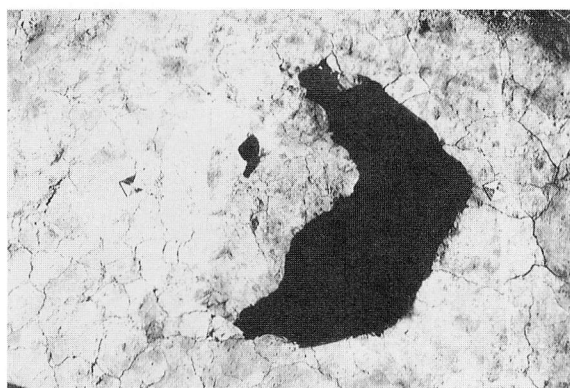
写真図版 6 3・4号柱穴列



1号土坑 (平面)



断面



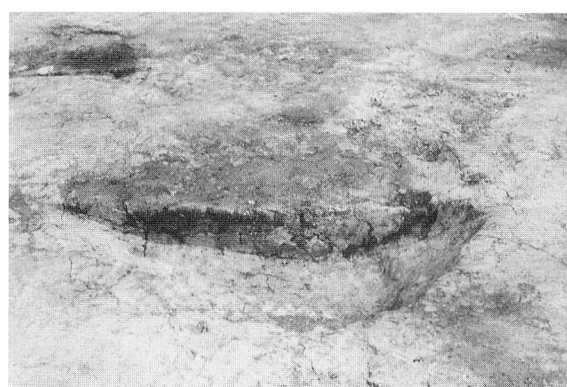
2号土坑 (平面)



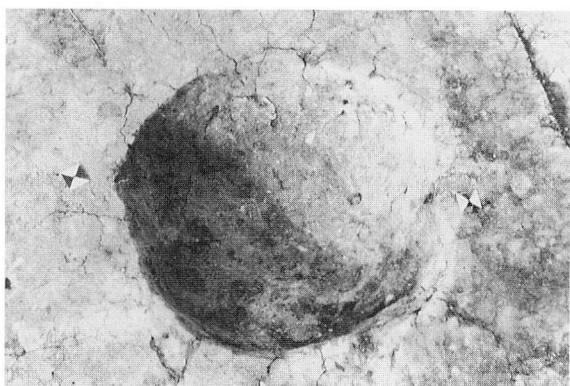
断面



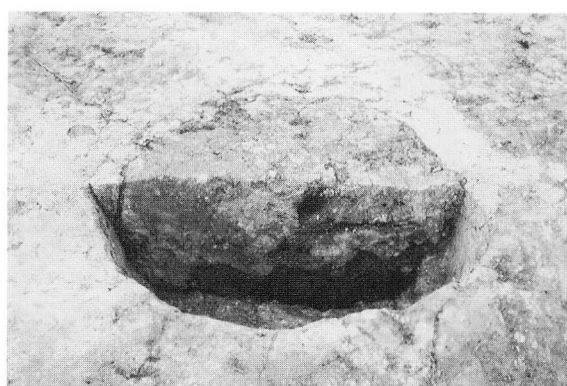
3号土坑 (平面)



断面

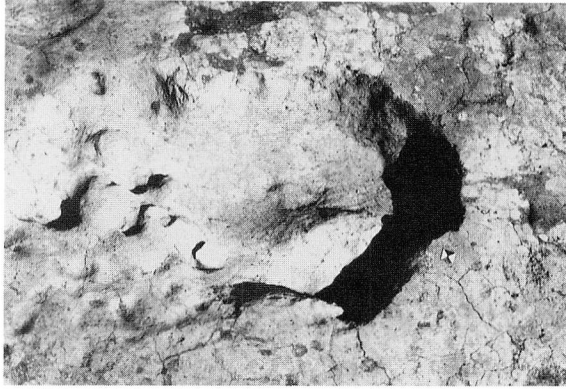


4号土坑 (平面)

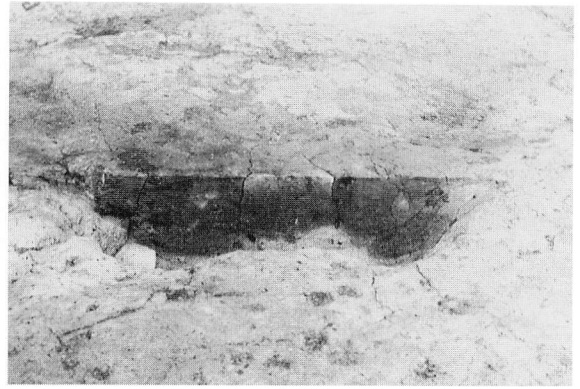


断面

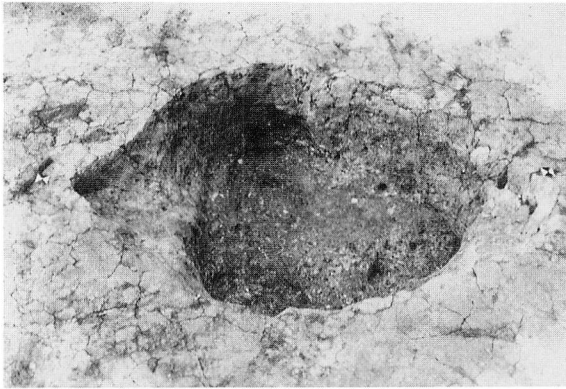
写真图版 7 1~4号土坑



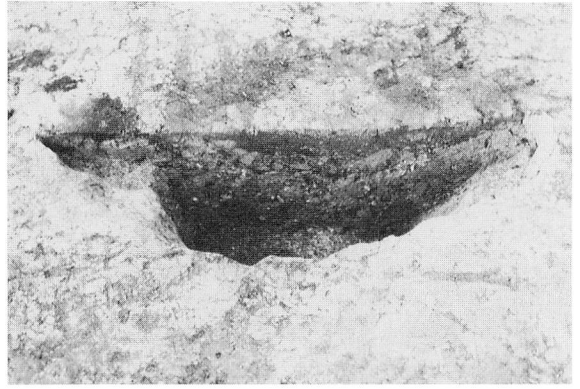
5号土坑 (平面)



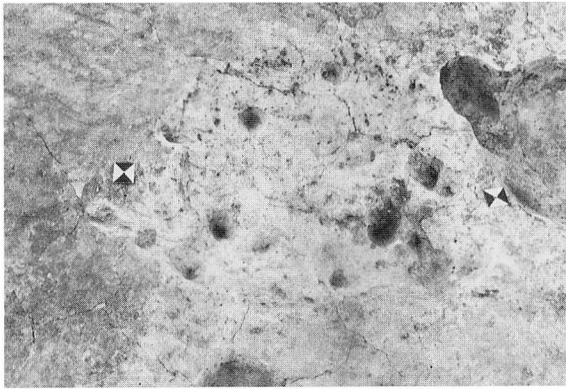
断面



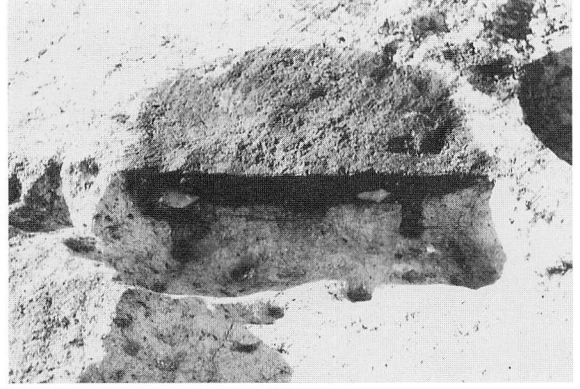
6号土坑 (平面)



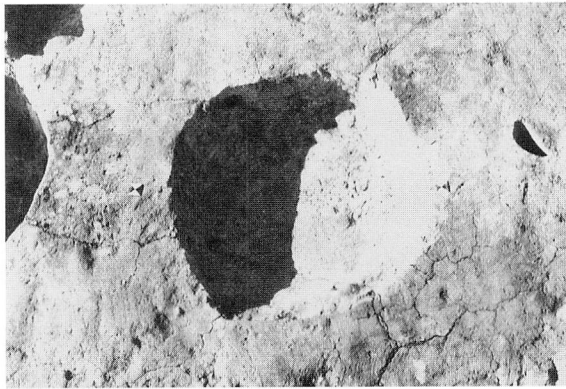
断面



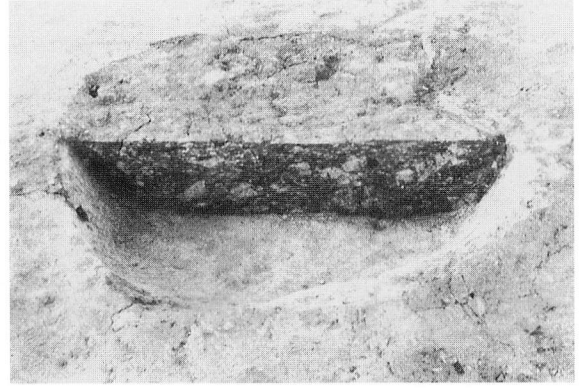
7号土坑 (平面)



断面

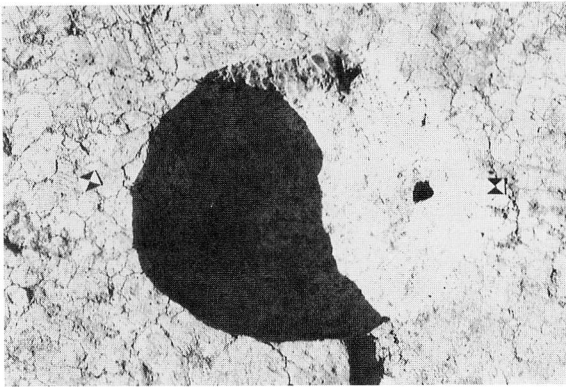


8号土坑 (平面)

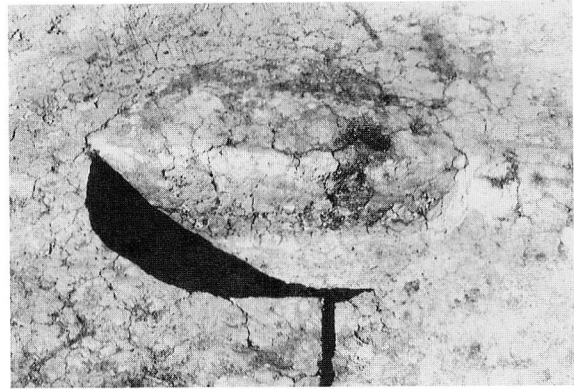


断面

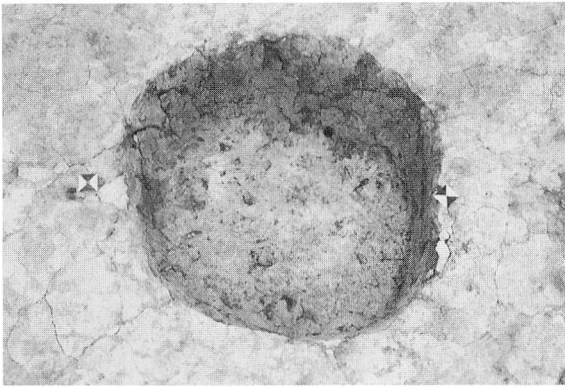
写真图版 8 5~8号土坑



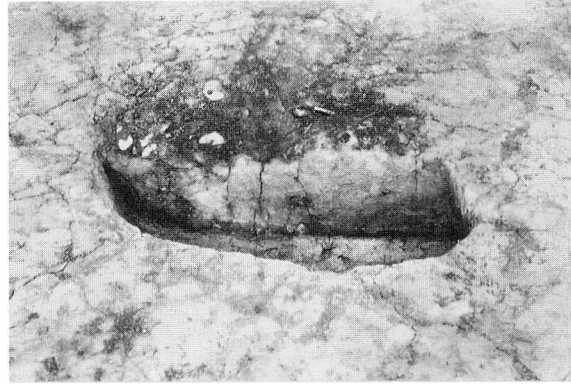
9号土坑 (平面)



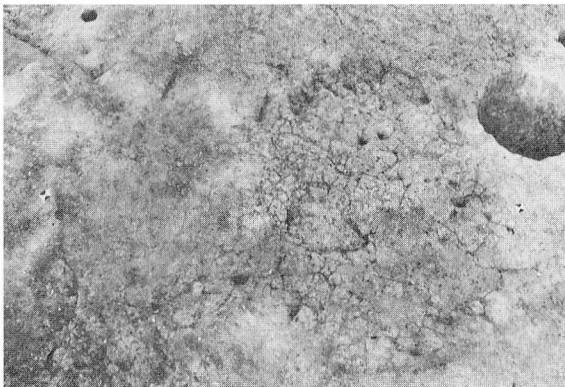
断面



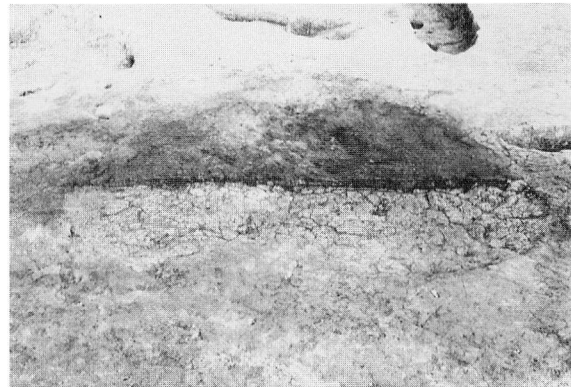
10号土坑 (平面)



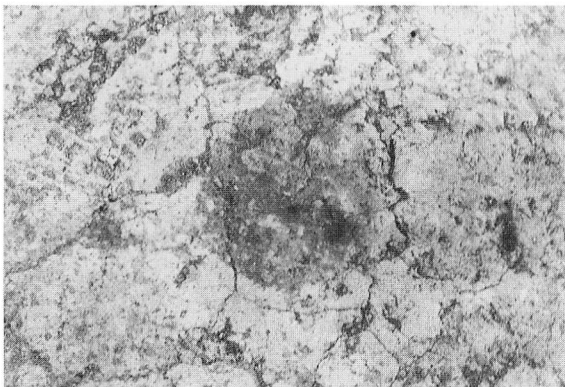
断面



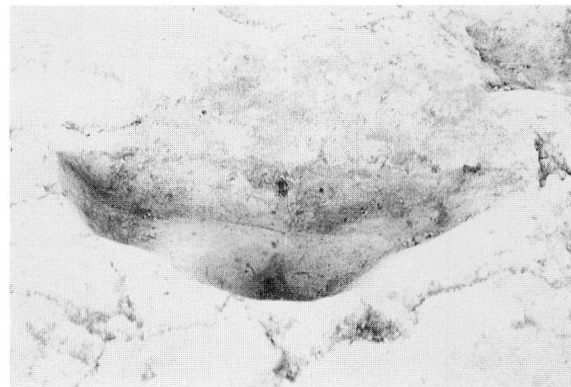
11号土坑 (平面)



断面

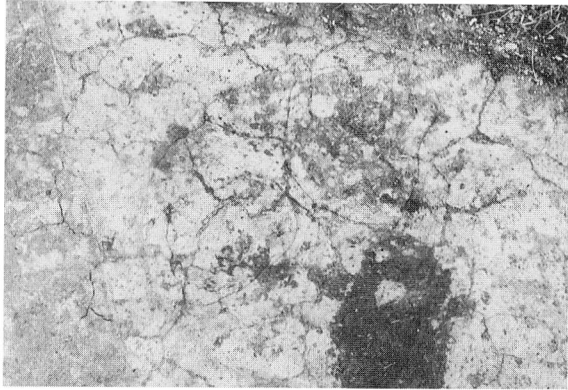


1号烧土遗構 (平面)



断面

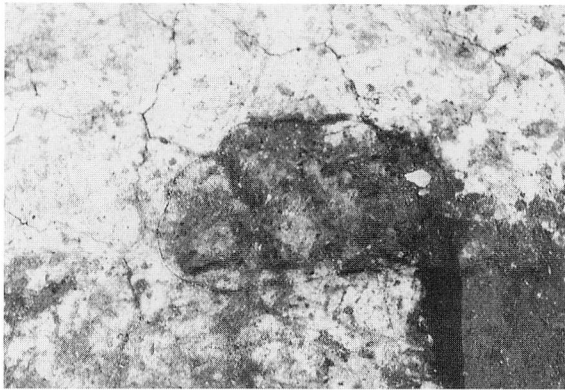
写真図版 9 9～11号土坑、1号烧土遗構



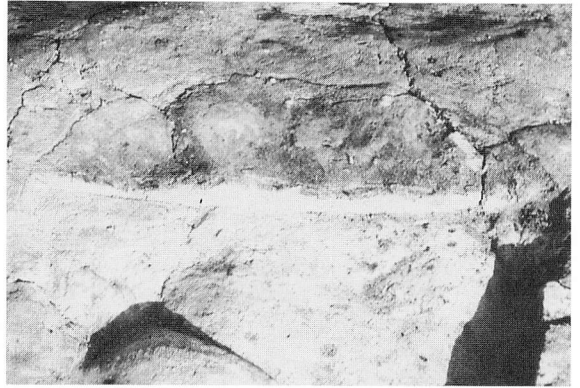
2・3号烧土遺構（平面）



断面



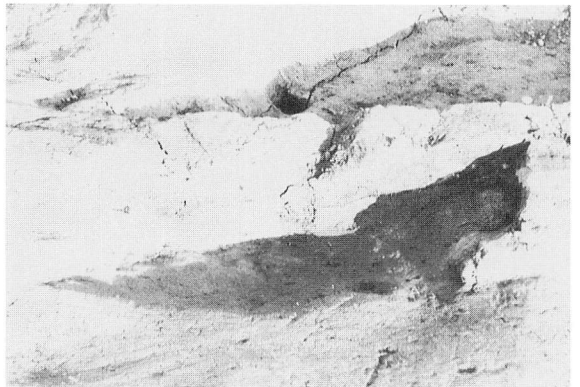
4号烧土遺構（平面）



断面



5号烧土遺構（平面）



断面



6号烧土遺構（平面）

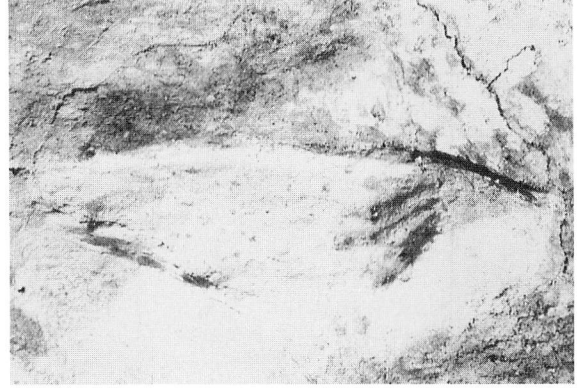


断面

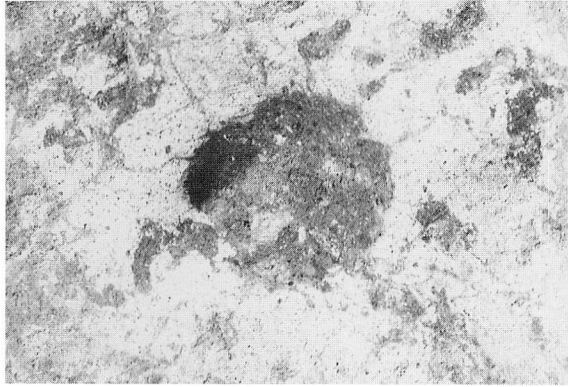
写真図版10 2～6号烧土遺構



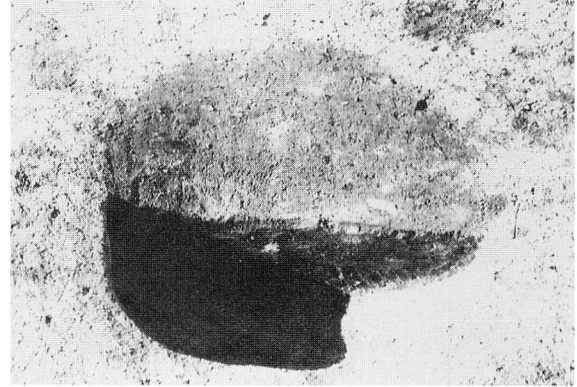
7号烧土遺構 (平面)



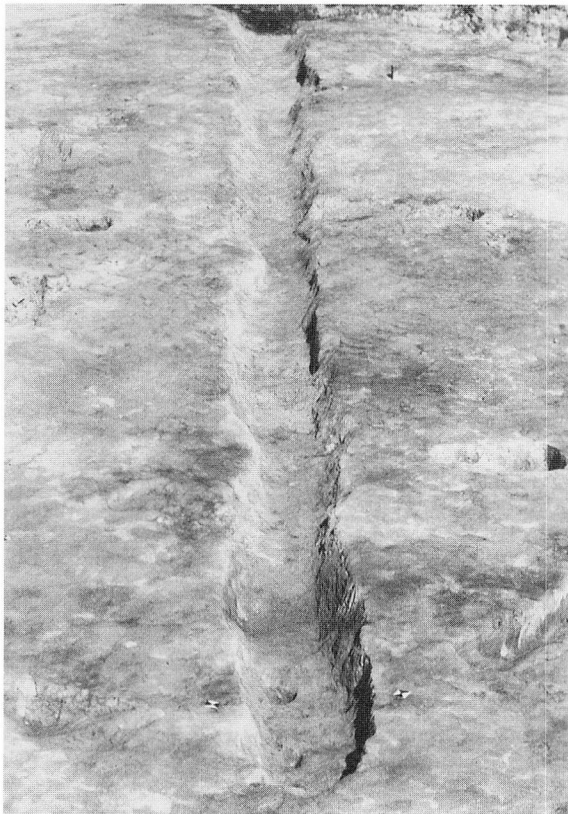
断面



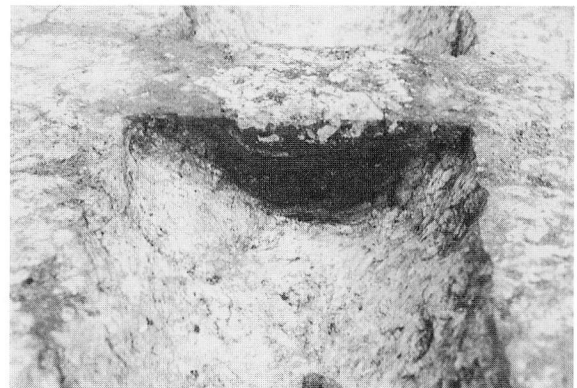
8号烧土遺構 (平面)



断面



1号溝跡 (平面)



断面 1

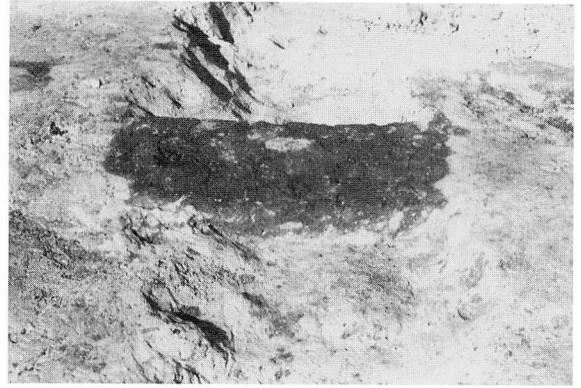


断面 2

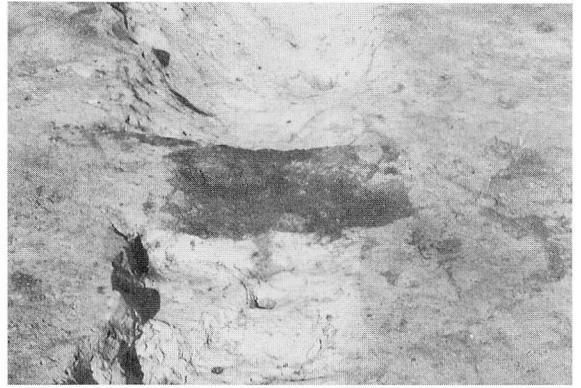
写真図版11 7・8号烧土遺構、1号溝跡



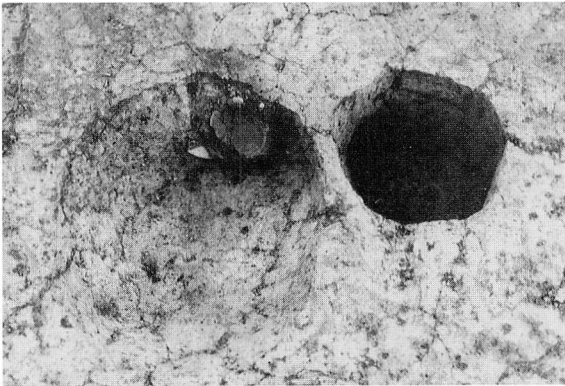
2号溝跡（平面）



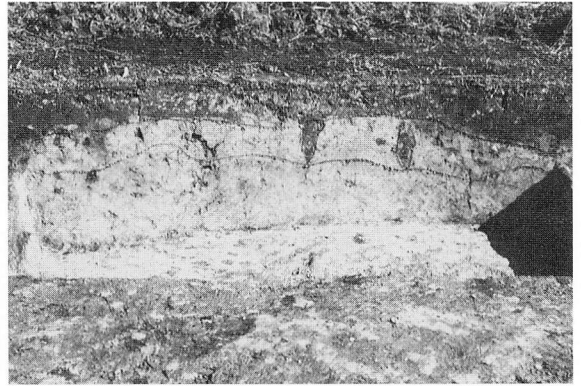
断面1



断面2

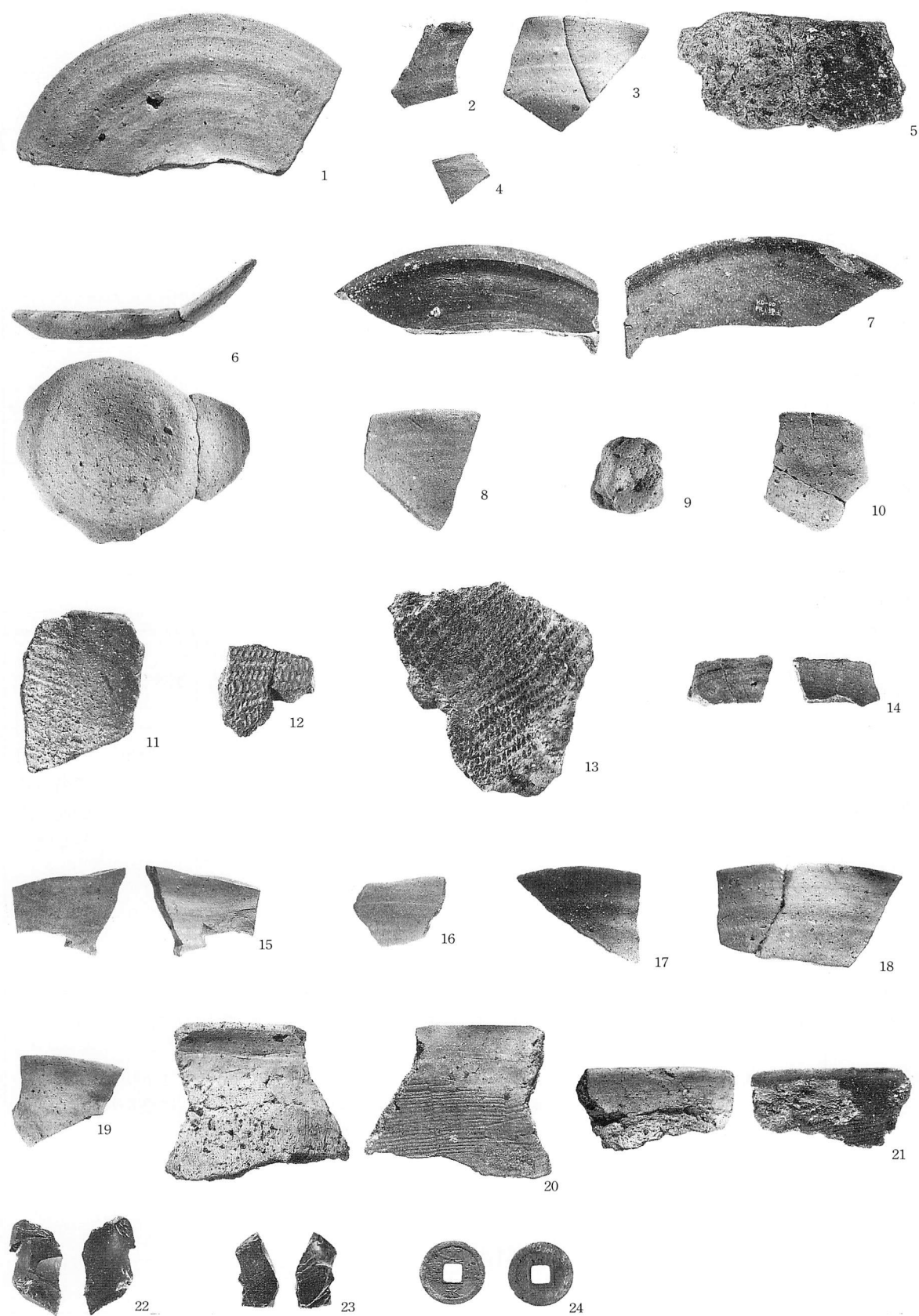


pp 1 土器出土状況



基本土層

写真図版12 2号溝跡、pp 1 土器出土状況、基本土層



写真図版13 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	こんだてあとはつちつちょうさほうこくしよ							
書名	金館跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第378集							
編著者名	岩淵 計							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2001年10月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こんだてあと 金館跡	いわてけんしわぐん しわちょうみなみ ひづめあざうめだ 2-1ほか 岩手県紫波郡 紫波町南日詰字 梅田2-1ほか		LE 76-1235	39度 01分 13秒	141度 8分 33秒	2000.10.02 ～ 2000.11.07	2,300㎡	一級河川 滝名川基 幹河川改 修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金館跡	城館跡	平安時代 中世	曲輪 1ヶ所 堀跡 1条 柱穴列 5基 土坑 11基 焼土遺構 8基 溝跡 2条 柱穴状小土坑 33基		土師器片 須恵器片 縄文土器片 石器(縄文時代) 銭貨		北上川支流の北岸 に築かれた城館跡	

平成13年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長	伊 藤 民 也	副 所 長	高 橋 正 儀
〔管理課〕			
管 理 課 長	葦 沢 正 吾	嘱 託	高 橋 照 雄
管理課長補佐	山 崎 善 光	〃	佐々木 光 重
管理課長補佐	山 岸 直 美	〃	加 藤 美代子
主 査	立 花 多加志	〃	湯 沢 邦 子
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	
調査第一課長	佐々木 勝	調査第二課長	高 橋 與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木 清 文	調査第二課長補佐	中 川 重 紀
調査第一課長補佐	高 橋 義 介	文化財専門員	金 子 佐知子
文化財専門員	小山内 透	文化財調査員	阿 部 眞 澄
文化財調査員	中 田 迪	〃	飯 坂 一 重
〃	飯 森 秀 文	〃	阿 部 徹 宏
〃	赤 石 登	〃	濱 田 宏
〃	吉 田 充	〃	安 藤 由紀夫
〃	亀 大二郎	〃	高 木 晃
〃	小 原 眞 一	〃	佐 藤 淳 一
〃	佐々木 信 一	〃	星 雅 之
〃	小笠原 健一郎	〃	菅 原 靖 男
〃	金 野 進	〃	半 澤 武 彦
〃	小 松 則 也	〃	杉 沢 昭太郎
〃	岩 淵 計	〃	溜 浩二郎
〃	鳥 居 達 人	〃	中 村 直 美
〃	金 子 昭 彦	〃	西 澤 正 晴
〃	羽 柴 直 人	〃	八 木 勝 枝
〃	千 葉 正 彦	〃	(阿 部 勝 則)
〃	長 村 克 稔		
〃	星 幸 文		
〃	佐 藤 あき子		
〃	菊 池 貴 広		
〃	村 上 拓		
〃	本 多 準一郎		
〃	村 木 敬		
〃	北 村 忠 昭		
〃	高 瀬 克 範		
〃	丸 山 浩 治		
〃	島 原 弘 征		
〃	中 村 絵 美		
期限付調査員	小 林 弘 卓	期限付調査員	吉 川 徹
〃	江 藤 敦	〃	北 田 勲
〃	菊 池 賢	〃	吉 田 里 和
〃	井 上 信 介	〃	原 美津子
〃	川 又 晋	〃	齋 藤 麻紀子
〃	吉 田 真由美	〃	駒木野 智 寛
〃	坂 部 恵 造		
〃	木 村 ひかり		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第378集

金館跡発掘調査報告書

一級河川滝名川基幹河川改修事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成13年10月22日

発行 平成13年10月25日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 有限会社 内海印刷

盛岡営業所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108

TEL (019) 622-0288

本社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4

TEL (0193) 23-5511